

飯野ビル全景



ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター

*** 2016年度新年賀詞交換会のご案内 ***

恒例の新年賀詞交歓会を下記要領にて開催いたします。皆様ふるってご参加下さい。

開催日：2016年 **1月20日** (水) **12:00～** (開場は11:30～)

会 場：**双日株式会社・本社21階 大会議室**

東京都千代田区内幸町2-1-1 (飯野ビル内)

アクセス：*千代田線・日比谷線「霞ヶ関」**出口C4**方面、案内板に従い、
3階オフィスロビー迄

*丸ノ内線、「霞ヶ関」**出口B2**より徒歩5分

*銀座線、「虎ノ門」**出口9**より徒歩3分

会 費：**無 料** (軽食、飲物を用意致します。)

特記事項 (要注意)

- ① このビルはセキュリティ確保のため、各自 **入館カード** が必要です。
ゲートを通るには、必ずこれを使います。SUICAやPASMOと同じ使い方です。
このカードは、お帰りの時も使いますので、失くさぬよう御注意下さい。
- ② この案内ページは、入館カード入手のための**引換券兼用**としています。
下の枠の中に氏名を記入の上、**このページを切り取って** 持参して下さい。
- ③ 当日は、3階ロビーの双日(株)受付近辺に待機している担当世話人にこの引き換え券を渡し、**入館カードを受け取って** 下さい。

入館カード 引換券	
ニチメン東京社友会 会 員	氏 名

* その他お問い合わせは、会報末尾の「世話人一欄表」記載の世話人にお寄せ下さい。

なお、社友会事務所のFAXは03-6858-7216 Eメールはmenkwa@sojitz.com です。

(以上)

双日(株) オフィス 周辺の案内図

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング



地下鉄アクセス

メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4

メトロ丸の内線「霞ヶ関」下車、出口B2

メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

退 任 の ご 挨拶

前会長 島 崎 京 一



2013年7月の総会にて、河西良治さんの後任として会長職をお引き受けしました。体調必ずしも良好とは言えない状態でしたが、私の愛したニチメンの社友会の為に少しでもお役に立てるならばと決意しました。また皆様と総会や新年会でお会いして、お互いに久闊を叙するのが何よりの喜びでした。

加えて、2006年より長月会から生まれ変わった東京社友会を支えて熱心な協力を惜しまなかった世話人の皆さんに押されて、二年間、無事会長職を全うできました。私のニチメン退職後の人生の心のモニュメントとなりました。

この7月の総会に際して、体調悪く、欠席のやむなきに至りました。

これを機に、会長職を退任し、石原啓資さんに移譲する件、役員世話人会にて衆議決定いたしました。

本来ならば、総会の席で皆様にご挨拶し、お伝えすべきでしたが、この場を借りて、ご支援を頂いている双日(株)およびOB／OGの皆様に、深甚なる謝意を表します。

ニチメン入社、以来もう半世紀以上の歳月が過ぎました。

往時茫々といいますが、OB会で皆様とお会いして、往時をビビッドに思い起こすことも出来ました。

社友会の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈りして閣筆といたします。



2015年総会 来賓ご挨拶

双日(株) 代表取締役副社長執行役 茂 木 良 夫



皆様、今日は。只今ご紹介に預かりました、茂木でございます。本来であれば社長の佐藤が本席でご挨拶をすべきところですが、本日は所用があり、私が代りにご挨拶をさせていただきます。

さて、先月の23日、双日の第12回定時株主総会を開催致しました。

その席上、昨年度の業績と新たに策定した新中期経営計画をご報告させて頂きましたが、皆様にもその一部をご報告したいと思います。

昨年度の実績でございますが、330億の当期純利益を達成するという期初目標を立て、役職員一同頑張って参りました。結果的には331億円となり、僅かながら目標を上廻ることが出来て、私共もホッとしているところでございます。

中期経営計画では、先ずは財務体質を強化する、ということはこの10年間の至上命令としてやって参りました。お陰様で、この3年の間でも2,000億円以上の自己資本が積み上がり、現在の自己資本は約5,500億となりました。

この強固になった財務体質に基づき、今回の新中期経営計画では攻めに転じよう、という方針を立て、今後3年間の投融資では、前回の中期経営計画よりも倍増する3,000億円を新規の投融資計画として挙げております。また、当期純利益では、最終年度600億円を目標としており、株式配当も従来の配当性向20%に5%上乘せした25%を達成して、株主の皆様のご期待に添いたいと考えておりますので、社友会の皆様からも宜しくご支援を賜りたいと思います。

世界情勢を見ますと、エボラ出血熱あるいはロシアのクリミア侵攻等の問題が発生し、これらが落ち着くかと思うと今度はギリシャ危機、あるいは中国株の下落と、次から次へと大波小波が押し寄せて参ります。役職員一同これらの問題を乗り切って、皆様と共に利益達成の喜びを分かち合いたいと思いますので、宜しくご支援の程お願い申し上げます。

最後になりましたが、先程の石原次期社友会・会長からのご挨拶にもありましたように、ここに来て猛暑日が続いております。本日ここにお集まりの皆様のご健勝とニチメン東京社友会の益々のご発展を祈念しまして、私の挨拶とさせていただきます。 どうも有難うございました。

2015年度社友会総会 挨拶

新会長 石 原 啓 資



只今ご紹介いただきました石原でございます。

島崎会長様から「石原君、次の会長やってくれ、俺は健康が続かん。」というお話を頂いてご推薦を頂き、先週の世話人会で私の新会長のご承認を頂いた、というご報告を受けました。

島崎さんからそこまで云われると、また、先ほど長谷川副会長の方からもお話があったように生みの親だというお話で、私もこれ以上断り切れないな、ということで、お請けすることに致しました。

しかし最初は、島崎さんから20歳近くも若返るのは聊か問題じゃないのかな、と私なりに感じまして色々と悩みましたが、この会を作った張本人というか、10年前の2005年に北京から戻って来まして、人事総務担当役員補佐という形で職を頂いていましたら、一昨年亡くなった、当時の西村顧問さんから「石原、日商岩井には社友会がある、ニチメンには社友会がない。

将来のことを考えるとニチメンの社友会を作らなければマズイだろう。そのためには君の今のポジションがピッタリだ。」と言われてまして、東西色々走り回って、皆さん方にニチメン社友会のお願いに当たりまして、東京で2006年、大阪で若干遅れて、社友会が出来上がった、ということで、肩の荷をホッと降ろして、本業に全力を尽くして参りました。そして本年の3月末で現役引退ということになりましたので、そろそろ皆さんのお役に立てることがあるのであれば、新会長をお引き受けさせて頂こうかな、というふうに思いまして、今回承諾させて頂くことに致した次第です。

これからは是非皆さん方と一緒に、ニチメン東京社友会がOBの皆さん方の親睦を益々深められる運営をしてゆきたいと思っております。

引き続きご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本日も猛暑日、35度に近い温度にもなっております。

皆さんの顔を拝見していると、お元気そうなのですが、この暑さに耐えられるようにご健康で、日々過ごされることを祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

宜しくお願い致します。

第10回 ニチメン東京社友会総会・懇親会 開催報告

副会長 長 谷 川 洋

2015年7月14日（火）、双日㈱本社21階 大会議室にて、開催。

11：30開場早々に続々と 懐かしい顔、顔が集まってこられた。出席者総数148名。
彼方此方で早くも久闊を叙する人の輪が出来た。

定刻12：00、第一部総会に入る。 長谷川が、議長の役目を務めた。

冒頭、島崎京一会長が体調不良で 欠席の已むなきに至った旨、皆様にお伝えし、ご了承を得た。双日㈱ご来賓、役員他の皆様にもご臨席の謝意を申し上げた。

ご来賓代表として、双日㈱代表取締役副社長・茂木 良夫様より、ご挨拶を頂戴した。
議事に入る前に、物故者への黙祷を行った。

【総会議事】

- | | | |
|----------------------|---|-----------|
| 1. 2014年度 事業報告・会計報告 | ； | 世話人 梶山 俊次 |
| 2. 上記事項の監査報告 | ； | 監 事 中原 正紀 |
| 3. 2015年度 事業計画・予算案報告 | ； | 世話人 梶山 俊次 |
- 以上、いずれも満場一致で承認された。

【報告事項】

1. 島崎 京一 会長の退任 （ ご挨拶は、本誌冒頭に掲載 ）
 2. 石原 啓資 新会長就任 （ 役員世話人会で審議・承認済み ）
- 以上につき出席者のご諒解を得た。

引き続き、第2部 ； 懇親会に入る。 総合司会 ； 世話人 浜口 信恭
アシスタントMC ； 小堀 裕子
まず、大西 勇さんによるショートメッセージと“乾杯！”

乾 杯 の 儀

大 西 勇

私は大西勇です。

『乾杯の儀』をするように言われました。

『乾杯』をする前にお礼を申し上げたいと思います。

まず、双日株式会社佐藤社長さんが企業理念として「誠実な心で世界を結び、新たな価値と豊かな未来を創造します。」とされています。

双日の皆さんがこれを実行し、業績を伸ばされ、配当を増加しておられます。感謝にたえません。

次にニチメン東京社友会で島崎会長をはじめ役員、世話人の方々に私どもが大変お世話になっています。誠にありがとうございます。

ここで「乾杯」を行います。

私が1、2、3と言って、次に皆さん全員が「乾杯」と大きな声で発声して下さい。

1、2、3、「乾杯」 有難うございました。



懇親会は、さんざめく楽しい雰囲気の中で楽しい出会いと語らいもあっという間に時間が来て、倉又則夫副会長・代表世話による挨拶と“中締め”でお開きを迎えた。又来年も元気で会えることを期して。



倉又副会長兼代表世話人

2015年総会・懇親会風景



長谷川副会長



左から荒木、水庫、吉水



左から大平、長谷川、小堀裕子、丸野、南部



左から岩田英昭、朝倉重道、長谷川



左から久保貞二、小林斉之助

2015年総会・懇親会風景



河西良治元会長



倉持、塚本幸雄



杉本佳久、西村照男、長谷川



山邑陽一、中川十郎、宮本正博

2015. 7. 14 (火) 開催

[双日関係ご来賓]

[一般会員]										[双日関係ご来賓]									
ア	浅朝東	子倉	豊重信	治道子	サ	小小近	林林藤	之幸子	介幸子	ハ	長埴浜	谷生口	川生口	洋勇恭	榮信博	原段茂	谷木井	繁良	大樹夫
イ	甘荒池	利木永	武由啓	子廣雄	シ	五坂桜	女井井	子穰司	子穰司	ヒ	林久平	本岡田	本岡田	之弘一	正紘昭	水武此	井井田	正哲博	人也史
ウ	石石石	黒原原	由啓靖	浩子資	ス	佐佐佐	藤藤藤	一三智	朗雄次	フ	廣深福	尾富井	富井家	孝明助	雄直正	松花田	井中井	正龍太	志勤郎
オ	井今入	田村江	正隆隆	造従夫	ソ	佐佐三	藤藤藤	美人孝	治久昭	ホ	堀本本	田間山	山田野	章代務	典登洋	田平山	濱村知	俊秀	裕悟康
カ	岩宇浦	木谷北	英弘克	史昭長	タ	清新杉	一水藤	孝治久	晃司一	マ	古堀本	田間山	山田野	雄生次	邦博博	高西伊	岡地岡	洋聡	一起平
キ	大久保	塚西野	静悦禎	三利生子	ナ	須陶曾	本藤山	治久晃	宏子能	ム	本牧榊	山田野	江浦本	夫三博	博正靖	吉高青	橋木	洋聡	弥平
ク	大大大	場平森	栗啓弘	勇良治	ツ	高竹田	我山尾	司一勝	宏子能	モ	松丸水	野庫江	浦本井	博武生	昌壽健	今小増	井堀川	恵裕恵	子子子
コ	大大大	山島田	岩隆陸	雄作雄	ト	塚利富	川本川	治仁行	郎紀郎	ヤ	宮村望	浦本井	上月江	朗児孝	国正一	六反	反	真智子	智子
	岡沖奥	村野野	賢良正	彦次稔	ナ	利富豐	根川根	治仁行	一郎子		森森矢	江島武	岸口邑	章雄光	一陽浩				
	小小小	西森木	順治	治彦郎		中中名	川原島	一郎子	男男男		安山山	山山山	本海弘	光一郎	幸秀ち				
	河数鐫	西森木	良正順	郎勲雄		滑成南	川見部	一郎子	男男男		山山山	山山山	本海弘	造一郎	邦一				
	川北金	西川城	幸弘貞	明二夫		西西庭	田村村	男男男	弘男弘		吉吉吉	吉吉吉	水本本	造一郎					
	久倉倉	保又持	則次久	雄彌三		野野野	村村野	弘男弘	三男男		渡		本本本	造一郎					
	栗古五	田藤島	彰慎	三二		橋	本爪	三男男	覚				本本本	造一郎					

出席者合計
148名

2014年度事業報告 及び 収支報告

(期間：2014年7月1日～2015年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業報告

	実績	千円 予算
第9回 総会・懇親会開催 (2014年7月10日) 146名 参加	533	700
会報・名簿の発行 17号 2014年12月15日発行、18号 2015年6月15日発行	410	800
ホームページの運用	111	350
第8回 新年会開催 (2015年1月16日) 155名参加	566	700
慶弔行事 白寿 1名 米寿 7名 の表彰を致しました。	455	500

II. 収支報告

A) 収入の部

1. 会 費	1,575	1,600
2. 双日助成金	2,300	2,300
3. 寄 付	50	0
4. そ の 他	21	0
合 計	3,946	3,900

B) 支出の部

1. 総 会 開 催	533	700
2. 新 年 会 開 催	566	700
3. 会報・会員名簿の作成	410	800
4. ホームページの運用	111	350
5. 会 員 慶 弔	455	500
6. 世話人会の運営経費	335	300
7. 事務所運営経費	759	850
8. 予備費+雑費	157	100
合 計	3,326	4,300

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	620	-400
前期繰越金	1,983	1,983
当期末繰越金残高	2,603	1,583
次年度以降年会費等	1,089	
双日次年度助成金	575	
預り金残高	1,664	
合 計	4,267	

2015年度事業計画 及び 収支予算

(期間：2015年7月1日～2016年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業計画

	実績	千円 予算
第10回 総会・懇親会開催 (2015年7月14日)	700	533
会報・名簿の発行 ・名簿の発行も予定しています。	1,500	410
ホームページの運用	350	111
第9回 新年会開催	700	566
慶弔行事 (長寿表彰予定者 9名)	500	455

II. 収支予算

A) 収入の部

1. 会 費	1,500	1,575
2. 双日助成金	2,300	2,300
3. 寄 付	0	50
4. そ の 他	0	21
合 計	3,800	3,946

B) 支出の部

1. 総 会 開 催	700	533
2. 新 年 会 開 催	700	566
3. 会報・会員名簿の作成	1,500	410
4. ホームページの運用	350	111
5. 会 員 慶 弔	500	455
6. 世話人会の運営経費	350	335
7. 事務所運営経費	850	759
8. 予備費+雑費	100	157
合 計	5,050	3,326

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	- 1,250	620
前期繰越金	2,603	1,983
当期末繰越金残高	1,353	2,603
次年度以降年会費等	0	1,089
双日次年度助成金	0	575
預り金残高	0	1,664
合 計	1,353	4,267

2014年度分未納者は大至急2015年度分と合わせ納付頂きますようお願いします。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) ゆうちょ銀行

口座番号：00100 - 4 - 318041

口座名義：ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会 代表 倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄に ご自身の名前を最初に 左詰めで 記載願います。
(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると 振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)：

相原淑、石川勝美、井本公一、岩居宏一、江渕正昭、大野久生、大村譲、柿本寅之助、相原淑、蟻本守夫、石川勝美、伊藤安雄、井本公一、岩居宏一、江渕正昭、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、木内純一、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、斉藤弥、佐藤信世、椎木与志也、高間宏治、伊達邦雄、中村昌義、南部晴雄、西尾敬一、平岡昭三、福原昭二、藤田一郎、藤野泰三、古川熙、堀部義数、松尾憲一、丸山修作、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、山口富治、山口富美子
以上 38名

(註3) 2016年度(2016.7～2017.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

赤澤宏哉、池田照幸、今田時男、熊谷信弘、小西重勝、新藤孝、土橋勇、中谷勝、中原正紀、西田昇、野城恒男、野本定男、羽中田鐵也、平井出良彦、細谷和夫、牧洋生、松坂茂、松田實、八津道夫、吉内健次
以上 20名

(註4) 2015年6月以降で 寄付をいただいた方 (入金順、敬称略)

藤野泰三、大村譲、高間宏治、岩居宏一、国領和彦、北村俊夫、斉藤弥、門松孝、堀部義数、西尾敬一、大野久生

2016年度長寿者お祝い対象者リスト

白寿	1918年生まれ	対象者：なし
米寿	1929年生まれ	対象者：11名

*米寿；大塚 静子 1月・新野 敬一 2月・廣瀬 一彦 6月・亀田 昭 7月
古藤 彰三 7月・三島 敏夫 7月・宮浦 博 10月・吉田 孝生 10月
中野 稔吉 11月・松本 忠夫 12月・浦谷 弘三 12月

[illegible]

報 訃

(平成27日6月1日～27年11月30日)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	羽 島 昭 一	物 流	2015年03月19日	77歳
2	山 口 良 孝	機 械	2015年06月25日	96歳
3	田 村 昌 久	物 流	2015年07月06日	78歳
4	渡 利 陽	社 長	2015年10月07日	83歳
5	森 本 俱 行	機 械	2015年10月07日	78歳
6	※平 尾 洋 一	業 務	2015年10月12日	57歳
7	佐々木 俊 郎	業 務	2015年10月20日	76歳
8	※浜 島 儀 則	機 械	2015年10月23日	58歳
9	佐 藤 智	燃 工	2015年11月02日	74歳
10	松 崎 利 夫	管 理	2015年11月07日	83歳
11	※平 床 幸 次	機 械	2015年11月07日	67歳
12	※望 月 澄 輝	化 工	2015年11月10日	67歳
13	※加 藤 忍	人 総	2015年01月28日	69歳
14	新 井 清 治	業 務	2014年11月 不 明	82歳
15	※西 村 泰 輔	業 務	2015年02月12日	84歳

ニチメン大阪社友会

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	石 川 泰 子	財 務	2 0 1 5 年 0 4 月 0 4 日	8 1 歳
2	野 村 喜久雄	機 械	2 0 1 5 年 0 7 月 1 4 日	9 0 歳
3	池 島 幹 生	織 維	2 0 1 5 年 0 7 月 1 4 日	8 9 歳
4	西 田 八洲男	木 材	2 0 1 5 年 0 8 月 0 5 日	7 2 歳
5	橘 一 郎	化 工	2 0 1 3 年 0 6 月 0 8 日	8 8 歳
6	安 藤 義 長	元監査役	2 0 1 5 年 1 0 月 1 4 日	9 6 歳
7	大 西 憲 二	経 理	2 0 1 5 年 1 1 月 1 1 日	7 2 歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

会員寄稿文

年々歳々花相似

三分一 克 美

庭やベランダに出る時間が気がついてみるとだんだん長くなってきた。ゆっくり見ると様々な花や実がその都度目を楽しませてくれる。

そこで、ここ数年はカレンダー手帖に花や実を月ごとに記録することにした。

幸い手元に“原色牧野日本植物図鑑”全三巻があるので、名前のわからない花や実をこまめにひもどくの楽しみの一つとなりつつある。

家族が植えたもの、知人に頂いたもの、知らぬ間に小鳥が種を運んだと思われるもの、夫々に様々な生い立ちがある。

そろそろ、芽が出る頃とか、花の咲く頃、実のなる頃、紅葉の頃と年年待ちわびる気持ちは何時までも大切にしたい。

1月 クリスマスローズ（白） 椿 梅

2月 福寿草 草木瓜（しどみ） クロッカス クリスマスローズ（赤）

3月 韭花 子貝母（こばいも） ムスカリ 春蘭 ヒヤシンス 桜草 五葉あけび 三葉あけび 海棠 チューリップ デンドロ シャガ つるにち草 アイリス 片栗 アマリリス ほけ

4月 つつじ 山芍薬 真弓 都忘れ 芍薬 木蓮 ガーベラ 青木 スノーフレック 山椒 シラー セッコク オニソグラム 牡丹 むかで蘭 すみれ 紫陽花 あまな どうだんつつじ

5月 鈴蘭 菖蒲 紫蘭 オダマキ さつき ほたるぶくろ 三時草 たちあ

おい 石榴 万年青 百合 下野
ゼラニウム 孔雀シャボテン 南天
美女柳

6月 桔梗 千両 万両 紫式部 のうぜんかずら 半夏生 くちなし ねじばな 月下美人 風船かずら

7月 竜の髭 むくげ 百日紅 リコリス おりずる蘭 やぶこうじ ひめおうぎ

8月 朝顔 花みょうが みずひき

9月 彼岸花 ほととぎす しゅうめい菊 アザミ ぶどう 玉すだれ リコリス

10月 金木犀 サフラン つわぶき パンダ にしきぎ ひめやぶらん

11月 水仙

12月 かにしゃぼてん 蠟梅



会員寄稿文

……“わが老後の楽しみ”:趣味いろいろ……

＝“古代史研究”“囲碁”“太極拳”“アフリカ情勢ウォッチング”そして“ニチメンの仲間との談笑会”＝

大 谷 毅丈夫

15年前 無職になった時これからの不透明な人生楽しく生きる為いろいろ趣味らしきものを選択しましたが何とか続いております。

まず、体力維持の為 覚えやすく教えやすい「簡化太極拳」に入門して一時期クラブ創設・会長まで頑張りましたが一昨年の脳再手術を前に運営からは手を引き、今は多数の女性の間でよろめきながら手足を動かしています。気分はいつも爽快です。

次の趣味候補は囲碁です。一向に上達しませんが「次に勝つ為に打つ」と考えると敗戦もあまり気になりません。ただしヤク石効なくボケの進行は止まりません。

心身共に鍛えられるのは古代史研究です。終戦後に日本人騎馬民族説を唱えられた江上先生が立ち上げられた「東アジアの古代文明を研究する会」に入れて頂き昨秋には茨城県の古墳を十か所も巡り改めて日本・国家の創設・近隣との交流を考えさせられました。

もう一つ、趣味と呼ぶには余りに深刻なアフリカ問題にも多くの時間・神経を使っています。7年前本誌に「駐在地＝紛争地」という拙文を掲載して頂きましたが、今もスーダン・ナイジェリアのニュースに接すると希薄になっている記憶とのつながりを懸命に探してしまいます。

スーダンは元々憎みあっていた南北勢力が2003年ダルフール地方で激突、バシール大統領は今もその際の非人道的罪で国際刑事裁判所から逮捕状が出ています。2011年

南スーダンはスーダン共和国から独立しましたが南スーダン領域内に豊富に眠っている地下資源を巡って南北間で武力衝突が起こっています。

南部スーダン人保護の為国連が作った「住民投票監視団」に元大統領まで派遣した米国との関係が悪化する一方でスーダン共和国は中国とは密接な関係にあり、2012年迄に中国は100億ドル投資して900マイルの石油パイプラインを建設、兵器分野でも中国ライセンスによる自動小銃の製造もされていると言われています。一方内部部族闘争が続く南スーダンに派遣されている我が国の自衛官が「駆けつけ警護」をもやる事になれば危険度が増すのではないかと案じていますがこんな心配が無用であって欲しいと願っています。

ナイジェリアは1966年連邦共和国として第一次共和制がスタートして以来ビアフラ戦争をはさみ現在まで軍政と共和制が交互に政権を取って現在は第4次共和政権下にありますが宗教・部族・貧富など根強い差異が国内不安の原因があるようです。この国は石油生産量は世界12位、同輸出量は8位で併せ天然ガスも豊富で（埋蔵量世界9位）国としては豊かな筈ですが国民全般にその恩恵が公平に分配されているのでしょうか？（国民間の収入格差を表すジニ係数は非常に高い）

上述二か国ともお国自体は現状お金持ちでありその地下資源は我が国にとっても必要な物です。その上の強みは人口の若さです。アフリカ総人口約10億としてその40%が14歳以下というのはヨーロッパ（15%）日本（13%）の高齢化を再確認させ

てくれます。

この大陸にどうアプローチして相互メリットを確保できるのか明確な回答にはまだ出くわして居りません。

マーシャルプランが欧州などで成功したのでアフリカ諸国へも援助資金が大量に供与されました。(後進国への援助総額2兆ドルの内断突で資金供与を受けたのはアフリカ諸国ですが供与条件とされた統治機能や透明性も資金のファンジビリティ(流用可能性)を制限する事にあまり効果がなかったようです。

その結果、援助資金の横領・汚職—その権益保護—強権発動—反発・反乱の図式が実現化した国もあったのではないのでしょうか？

勿論今後とも後進国への国家間援助は必要でしょうが民間主導でやれる事もあるのではないのでしょうか。

昨年ノーベル医学・生理学賞を受賞された大村北里大学名誉教授と共同研究した米国メルク社が大村教授の同意を得てアフリカ中心に失明につながる河川盲目症の特効薬を無償で10億人に与えた例はまさに直接援助と言えるでしょう。

商工業分野では日本メーカーが現地で製造・分包・販売している物資もあり現地企業や先進インド企業などと組む方策も考えれば進出できる地域・商品は沢山あるとおもいます。

もっともっとアフリカ考を深耕して趣味の域から前進したいと思います。もう堅めの話はここ迄にして一転楽しい近況報告を一つ：

昨秋名称も会則も会長もないのに10年以上続いている談笑会に参加しました。年3～4回誰かの思い付きでいつものメンバーに声かけして集まりアルコールを飲みながら飛び出した話題を熱心に論じ合っています。(時折関西の人や美人の参加もあり)メンバーが勝手な事言ってもワイワイ盛り上がるのはどうも根っこが同じだからかなと感じています。皆さんニチメン入社時輸出綿糸布部のあたりが出発点だったようです。かつては時間を忘れワインの空ビンが林立したこともありましたが現在は品よく数時間談笑したら「ほんじゃ又！」と議論中身はすっかり忘れて四散します。

ご紹介の為先般の会での写真を添付致します。



後列左から 内海和男、花岡直樹、大谷毅丈夫、松田邦夫、塚本幸雄

前列左から 高橋修造、辻村秀明(敬称略)

会員寄稿文

『ミステリ小説断想』(3)

福 富 直 明



「文学賞のこと」

文学賞と言えば、芥川賞と直木賞が有名だ。前者が純文学作品、後者が娯楽性の強い、いわゆる大衆小説を対象としている。両賞とも、対象期間内に出版された

作品から選出されるもので、山本周五郎賞、吉川英治文学賞、日本推理作家協会賞（以下推協賞と略）なども既出版の作品から選ばれる。選考委員たちが既成の有名作家や評論家なので、同業者が選ぶわけで、なんでもわざわざ競争相手に賞をやるんだという冗談を聞いたことがある。

これに対し、未発表作品、つまり活字になって出版されたことのないもの、新人作品を対象とした賞があり、全部で百を超える賞があるから、一旗揚げてみようという方には洋々たる未来がある（ように見える）。新人賞だと、400字詰め原稿用紙で350枚以上550枚以内といった枚数規定がある。ある賞の予選委員をやったことのある人が言っていたが、枚数規定を無視して1000枚の応募原稿を送ってきて、最後のページに「第一部▶完」と書いてきた猛者がいるとか。この投稿者がその後どうなったのか知らないが、それほどエネルギーがあったら、いま活躍している作家になっているかも知れない。

ミステリ小説の分野だと、江戸川乱歩賞、宝島社の“このミステリーがすごい！大賞”、推協賞が老舗だ。乱歩賞と“このミス賞”は新人であることという応募資格に規定は

ないが、いつの間にか新人賞と見做されるようになり、4年前だったか、数冊の実績のある作家が乱歩賞を受賞したとき、不満そうな人がいたし、受賞歴のある老作家が、受賞のこつは分かっているからもう一度応募しようかなと冗談を言っていた。乱歩賞の賞金の一千万円というのは、普通の長編を一冊書いた場合の印税を上回る額なのだ。一冊で一千万円稼げるのはベストセラー作品である。現実的に言えば、既受賞の作家が再応募することはまずあり得ない。選考委員である作家たちのほうが後輩の若手だし、落選したら週刊誌のネタにされてしまう。ペンネームを使っても、どこかでばれる。“このミス大賞”の賞金は1200万円で、これはミステリ小説コンテストの賞金としては世界最高である。海外の賞は、像とかプラケだけで賞金のないものが多い。英国推理作家協会（CWA）は、ウイスキーのメーカー、銀行、出版社、財団などスポンサーがつくと、賞金が出るらしい。それでも、2万ポンド程度と聞く。日本だと、候補作はすぐ無視されるが、海外では“xx賞候補作！”と宣伝材料に使われる。

乱歩賞は、ときどき2作品が同時受賞することがあり、その時は、気の毒なことに、一千万円を半分ずつこすることになる。ちなみに、乱歩賞や“このミス大賞”は、毎年、300件から400件の応募原稿が届くから競争激甚で、10年くらい毎年投稿する人がいるとか。

これらの賞には、二重応募は失格とするとの規定がある。作家の卵にすれば、あっちの賞では落選したが、こっちでは認めてもらえるかも知れないという自負心がある

のだろう。しかし、二重応募は、ばれる仕組みになっている。膨大な数の応募作品を予選委員たちが分担して読み、出来のいい原稿を数作ずつ選び出し、他の予選委員の選んだものと取り替えっこして、5作品に絞って最終選考委員会に引き渡すのだが、A社の賞でもB社の賞でも、予選委員の何人かは同じ顔ぶれで、しかも記憶力抜群の人たちだから、この応募作はどこかで読んだぞと、ばれてしまうのだ。

推協賞は、長編および連作短編部門、短編部門、評論その他部門の3部門に分かれており、昔は予選委員会は各部門毎にあって、最終選考は5人で構成する委員会で3部門の受賞作を決定した。最終選考委員はいずれも推協賞受賞歴のある人たちだった。まず協会員からアンケートで推薦作を出してもらい、予選委員がそれをふるいにかけて部門毎の5作品を選んで、最終選考委員に回す。協会員のアンケート回答というのが意外にいい加減で、会員である作家たちは同業者の作品をあまり読んでいないのかと思われる節がある。予選委員は大体みんな評論などを手掛けている読書家たちだから、好評の作品を熟知しているのだが、その人たちも聞いたことのない作品が挙げられてくることがある。私が予選委員を委嘱されていた時、高山文彦さんの『火花』という本が推薦されてきて、予選委員の各位、この作品は聞いたことがなく、顔を見合わせた。やむ得ず、取り寄せて読んでみたら、ハンセン氏病だった作家、北条民雄の伝記で、見事なノンフィクションだった。しかし、北条民雄が推理小説の短編を一作でも書いていたら選考対象にできたのだが、推協賞の趣旨とは全然合致しないので、選考対象から外さざるを得なかった。あの作品を推薦してきた会員は一体何を考えていたのか、単に最近読んだ本を挙げてただけじゃないのかと、予選委員には迷惑な話だった。『火花』はその後大宅壮一賞を受賞

している。

5人で3部門の最終選考をするのは時間のかかる仕事だ。私がある長編作品を推したのに対し、小松左京さんが類似作品があると言って反対し、結論が出ず、短編の候補作を先に片付けようということになったら、意図的に対立を狙ったわけではないが、今度は私が推さぬ短編を彼が推す成行になった。しまいには、小松さんが、あなたが反対を引っ込めてくれたら、私もあの長編の授賞に反対しないよと、政治的決着を提案し、それで手を打った。「3時間の知的バトルだったね」と彼が言った。当時の新聞社の原稿締切が午後7時だったから、翌日の朝刊に載せてもらうために急がねばならなかった。

その後、長編と連作短編、短編と評論その他と、二つの最終選考委員会で審査する形に変更された。推協賞の受賞は一度限りで規定されているので、長編作品で受賞した人が優れた評論を書いても受賞対象にならない。何年か前に長編と短編と両方が最終選考に残った作家がいた。そのときは、別々の部屋で行われている選考委員会の間を立会理事が行ったり来たりして、進行状況を確認、長編が落選と決まってから短編の審議に入るという変な事態になった。

海外の賞では複数回の受賞が認められているものが多く、最優秀新人賞を取った作家が翌年に既成作家を対象にした最優秀長編賞を貰った例がある。前掲のCWAの場合、新人賞、スリラー賞、歴史ミステリ賞などなど、幾つも部門が分かれていて、複数受賞が認められているから、新人作家が19世紀を舞台にしたスパイ・スリラーを書いたら、3部門で受賞することもあり得るという。(実際には、まだ前例はない)

3,4年前から推協賞は、候補作をアンケートで探す代わりに、出版社が自社の作品を推薦する形式に変更された。この形式だと、

作家にすれば、おれの本を推薦してくれたのかと疑問を持つ。従って、どこが何を推薦したかという候補作リストは機密扱いされている。

推協賞は間口が広く、本格的な推理小説だけでなく、ホラー、冒険物、SFなども対象になる。『日本沈没』も受賞しているが、候補作に挙がったと聞いた作者の小松さんが「あの本、推理小説だったのか」と言ったと伝えられている。私が選考委員をやっていた時に中島らもさんの『ガダラの豚』が最終候補に挙がってきた。これは目茶苦茶の面白い小説で、選考会の席上では、これは推理小説じゃないぞという疑問を誰も口にせず、確か、全員一致ですんなり授賞を決めたと記憶する。授賞式のスピーチで、作者自身が、まさか推理作家協会から賞をいただけるとは、と言っていた。評論その他部門は、“その他”も対象になるから間口はさらに広く、『下山事件 最後の証言』とか伊藤忠の瀬島龍三氏の足跡を追求した『沈黙のファイル』なども受賞している。

推協賞の賞金は、千枚の長編でも、50枚の短編、書下ろし二千枚の評論でも、同額だ。それなら、短編に挑戦するのが効率がよさそうに聞こえるが、2015年度の場合の候補作品数は長編115篇、短編394篇、評論等48篇、選考結果は長編・評論等は2作品ずつ受賞作が出たが、短編は該当作なしと決まった。つまり、短編が一番受賞しにくい難関の部門であり、過去にも短編の受賞作のなかった年が何度かあった。

協会の監事を勤めていたとき、会計担当理事に宮部みゆきさんから決算報告を聞いていたら、妙な雑収入があるのに気が付いた。以前に受賞した人が賞金を返してきたのだという。後で情報通に訊いたら、その作家、受賞したあの作品は推理小説ではなかったと考えて、返金してきたらしい。自分が書いている分野について厳しい考え方

をする人物のようで、いわば原理主義者である。最終候補に残った段階で、協会からその旨通知し、異存ありませんねと問い合わせているし、授賞式にも出席して名刺を配ったりしていたから、あの頃は普通の人で、その後、原理主義的になったようだ。

本は返ってこない

「やっとNo!と言えた」という文章で始まるアメリカの女性ジャーナリストのエッセイがあった。彼女がノオ!といったのは、この本、借りて行っていいかと言った友人に対する返事である。経験的に、本を貸すと返ってこないことが多くて愛蔵書が戻ってこないのは困るのだが、断るのは彼女なりに勇気を要し、やっとノオと言えるようになったというのだ。

このエッセイは面白かった。私自身も、貸した本が返って来ないことを何度も経験している。初めて海外赴任したときは、まるで無人島に行くとしたらどんな本を持っていきますかというよくあるアンケートに答えるみたいに、考えに考えた挙句、2、3冊選んだ。その中の1冊が戦前に出版されたマルセル・ブルーストの短編集だった。希書だったが、希書だからといって、高価とは限らない。どれだけの人間が欲しがっているかによって。値段が決る。この本は高価ではなかったが、めったに手に入らない本だったし、ブルーストなる作家を知るのに役立ちそうな本だった。任地に着いて暫くして、先輩の某氏が何か読むものを貸してくれというので、このブルーストを貸した。これは失敗だった。どこに消えてしまったのか、彼からひと言の説明もなく、返ってこなかった。それから十数年後、たまたま彼と同じ職場になった。ある日、彼がアリスティア・マクリーンの冒険小説を読んでいるのを見かけた、驚いたのは、昼休みの間に読み終えたと見えて、デスクの横

の屑籠にその本をばいと棄てたことだ。この人にとって、本とは読み終わると紙屑になるのか。

その数年後、ヒューストンの駐在になった。そこで親しくなった他社のSさんがアパートに遊びに来て、私の書棚を眺めていた。あまり読書家とは思えない人だったが、挑戦してみようかと思いついたらしい。面白い小説があったら、貸してくれという。スパイ小説は英国の伝統芸だといわれるほど、英国作家のほうが達者で、アメリカの作家は遅れを取っていたが、この頃になってようやく英国のレベルに追い付き、Jack D. Hunterの"The Expendable Spy"が傑作と評価されていて、確かに面白かったので、この本を貸した。どうやら、途中で挫折したらしい。彼がこの小説を話題にしたことは一度もなかったし、本も返ってこなかった。

1970年代の半ばにブカレストの駐在になった。赴任する前に探したが、ルーマニアの歴史を書いた本は極めて少なく、クセジュ文庫の翻訳物と邦人ライターの新書サイズのものしか見つからなかった。私がこの本を持っていると知って、トーマンの支店長が貸していただけますかという。もちろん快く貸してあげたが、返せと要求しなかったのがいけなかったのか、ついぞ返ってこなかった。

1980年代にまた転勤して、ニューヨークに行った。同じアパートに住むわが社のH君が何か読む物を貸して下さいという。それで貸したのは、リチャード・スタークの悪党パーカー・シリーズの『人狩り』だったと思う。これは1967年に"Point Blank"の題名で映画化された小説だ。数日後、H君が申し訳なさそうに、この間借りた本、どっかになくしてしまって、いくら探しても出てこないんです、すみませんと謝る。

自分のアパートで読んでいたのなら紛失するわけがないから、出張したときに持って行って、出先でなくしたのだろう。

それから、また転勤になって、またヒューストンに行った。ケン・フォレットの国際謀略小説の新作が出て、評判になっていた頃である。Tが、あの本、もう読んだかと訊く。いや、まだだ、というと、早く買って、読んだら貸してくれと勝手なことをいう。そう言われても、読みたい本の順番があったから、すぐには買わなかった。すると、まだ買わないのかとTが催促する。こうるさくなったので、その小説を買ってきて、ダストカバーを外して本体を彼に渡して、まだ読んでないが、先に読めと言った。カバーを外したのは汚されるのが嫌だったからだ。ひと月くらいしてからか、Tが、あの本ほんとにまだ読んでなかったのかという。実は息子が夏休みで帰ってきていたのだけど、カレッジに戻った時に読みかけだったあの本を持って行ってしまったと弁解する。どう答えたか記憶にないが、当然、Tが息子から取り返すか、あるいは書店で買って私に返すだろうと思っていた。ところが、Tはその後この本については二度と言及しなかった。謝罪の言葉もなかった。これでTの品格に対する私の疑念は決定的なものとなった。結局、カバーだけが手元に残り、私は再度買った。

その頃から、私は物書きを始めていた。帰国後、知り合いになったミステリ小説専門誌の編集長が、海外で出た評論書を持っていたら貸してほしいという。編集長クラスに頼まれると悪い気はしない。アンソニー・バウチャーの"Multiplying Villains-Selected Mystery Criticism, 1942-1968"を貸してあげた。この本はヒューストンの古本屋で見つけたもので、475部の限定版の一冊で、165番というナンバーが手書きで入っている希書なのだが、編集長氏、いつまで経っても返してくれる気配がない。借りて

いるのを忘れたのか、恐るべきルーズな性格だった。なにせ限定版なのだから、こっちは忘れない。じっくり催促して、奪還に成功した。

この編集長はその後、ミステリ小説の冒頭部分の名文を集めたエッセイ集とミステリ小説に出てくる名文句を集めたエッセイ集を作る企画を立てた。前者は『ミステリの名書き出し100選』の題名で実現し、私にも原稿依頼が来て、リテル、キーティング、マクベインの3作家の作品の書き出しを選んで寄稿した。後者を企画しているときに、相談を受け、アメリカで出版されていた同じようなアイデアで編纂された本を貸した。しかし、企画は立ち消えになり、彼は私が貸した本のことを忘れた。そして、ぼっくり亡くなってしまった。

これはどれも作り話ではない。考えてみると、貸した本のジャンルは、純文芸、スパイ小説、歴史書、ハードボイルド、謀略小説、評論書、エッセイ集とばらばらだが、どのジャンルであろうと、貸した本は返ってこない。他人から本を借りる人は、本というものの価値をどう考えているのだろうか。借金や貸し衣裳なら返却するが、借りた本は貰ったのと同じで、本は返さなくてもいいんだという思い込みが意識下にあるのだろうか。サトウハチローが「青春はひとに貸したエロ本のように二度と帰ってこない」と言ったが、エロ本ならずとも、貸した本は青春のように帰ってこないのだ。大切な本、なにがしの思い出のある本、愛着のある本は絶対にひとに貸してはいけない。



会員寄稿文

ナポリ・シチリア両王国随想記

—皇帝フリードリッヒ二世とダンテの「神曲」—

竹 内 可 能

あの神聖ローマ帝国皇帝のフリードリッヒ二世のことが、ここ数年というものの私の頭から立ち去らないのは、多分わたしの好きな塩野七生のローマ物の読みすぎか、エルンスト・H・カントーロヴィッチ著す大作「皇帝フリードリッヒ二世」のなせるわざか。

折しも今年のはじめ頃であった。見るとでもなしの新聞の広告欄に「シチリア・南イ10日間の旅」とあるのが目にとまった。そこにはフリードリッヒ二世が生まれ育ち、長じるにおよんで統治することになる旧ナポリ・シチリア両王国（シチリア両王国、またはノルマン・シチリア両王国とも）に点在する、あまたの古代都市の名前が列記されていたからたまらない。わたしは取るものもとらずあえず、といった感じで女房と連れ立ちこの旅にジョインすることにした。

この旅は夜を日についで飛行機とフェリーそれにバスを乗り継いだものだったから、老骨には多少ハードではあったものの、わたしの旅の目的にはお誂え向きといえた。わたしの関心や興味はこれといった世界遺産的な遺跡や文物にあったわけでもなく、皇帝フリードリッヒ二世という己の夢の実現……カエサル・アウグストゥスのローマ帝国の再生……にかけて生涯を教皇と戦いつづけ、しかし最後はその夢も潰えて中世ヨーロッパの暗黒の彼方に消えた皇帝その人だったからである。

だからわたしはこの旅でも、フリードリッヒ二世が足しげく通ったと思われるパレルモやナポリ、シラクサやメッシーナその他数々の都市に（アグリジェントにまで）足を止め、その地の空気の匂いを嗅ぎ、あ

たりの景色を見まわすだけで大いに満足した。以下はそんなわたしのセンチメンタル・ジャーニーから、徒然なるままにわたしが想い起した皇帝フリードリッヒ二世とダンテの「神曲」のよしなしごとである。

「居抜き」の島シチリアと、

早熟の天才児フリードリッヒ二世

ギリシャ、カルタゴ、ローマ（帝国）、ヴァンダル族（ゲルマン）、東ゴート族、ビザンチン帝国、サラセン、ノルマン、神聖ローマ帝国、……

上掲の懐かしい数々の名称の羅列は、紀元前8世紀ごろのギリシャ植民都市に始まり、13世紀神聖ローマ帝国の皇帝フリードリッヒ二世の治世にいたる、およそ二千年の間シチリア島に侵入し支配を繰り返した者の時系列的な記載である。そういうわたし自身、頭のなかを整理しようとして書きつけて見たのだが、あらためて驚かされることがある。

一つにはこの島はかつて第一次ポエニ戦争時（紀元前3世紀）、ローマとカルタゴの主戦場となったが、それ以来シチリアはローマ第一の属州となり、その命運もまた古代ローマ帝国の栄光と挫折の投影であり続けたことである。そこにわたしが見取ったものは、古代ギリシャ・ローマ文明のまばゆいばかり光に照らされた時代の「明」と、その後の永く昏い帝国衰亡が影を差す「暗」、すなわちゲルマン民族やノルマン族そしてサラセン、さらには中世から近代にかけてのヨーロッパ諸国から被った劫略や侵略の歴史である。

そしてもう一つ、わが物語の主人公フ

リードリッヒ二世という中世ヨーロッパ世界が生んだ魁偉な皇帝の出現もまた、このような島の歴史の中にこそ必然があったことを思い知らされたことだった。

わが国には「居抜き」という調法な言葉がある。もともとは住宅や店舗を家具や商品、設備などをそのままにして売りにだしたり貸し出すことをいう。

先にわたしはシチリア島の目まぐるしい支配者の歴史の変遷のなかに高度な文明の垣塙を見てきたが、たしかにそこには先進的な地中海世界の人種的な混交によって触発されたと思われる、まぶしいばかりの文明の光があった。今度のシチリアの旅でわたしが得た感触も又、支配者が激しく交代するわりには、それぞれの支配者がそれぞれの時代に用いた建造物や様式など、その遺跡や遺構のなかにそのまま見ることのできる歴史の混交状態の不思議である。

ギリシャもローマもビザンチンも、そしてサラセンであれノルマンであれ、さらには神聖ローマ帝国にしても、戦いに敗れて立ち退く者が、自らの過去を「居抜き」のままでと考えたわけでもなかろうが、さりとて新たな侵入者がこの地に侵攻するにあたって、後々の己の支配を勘案して破壊に手心を加えるというようなことがあるはずもない。

とまれわたしがこのシチリアのことを敢えて「居抜き」の島と呼んだのは、上述のようにギリシャ、カルタゴに始まり皇帝フリードリッヒ二世に至る、シチリア島二千年のめまぐるしい支配者の去来に、わたしが見た歴史のかたちであった。そしてそのような居抜きのかたちの実体はといえば、支配者たち（侵入者）の度重なる入れ替わり立ち代わりにもかかわらず、この島の絶対君主制的な支配体制だけは、旧態依然として（フリードリッヒ二世のホーヘンシュタウフェン家の滅亡後も近代の19世紀に至

るまで）存続してきた歴史的事実ではなかろうか。おしなべていえば、これぞシチリア島の化石的奇観という他はないのである。

さて、フリードリッヒ二世が稀代の早熟天才児であったことは、どうやら素人が口をさしはさむ余地がなさそうである。しかし同じ天才といったところで分野の違いは千差万別にちがいなかるう。科学の分野一つとってみても物理だの化学だの医学などどれほどの多岐にわたるものか。人文分野にしても芸術や文学にかぎらず政治や社会といった分野まで押し抜ければ際限もない。

ところがフリードリッヒ二世の天才を語るとき、史家の謂いにはこんな響きが感じられる。すなわち彼は「統治者（皇帝）にして哲学者、哲学者にして将軍、将軍にして詩人、詩人にして政治家、政治家にして数学者、数学者にして外交家、外交家にして法律家、法律家にして建築家、建築家にして博物学者……」ざっとこういった類なのだ。要すればマルチ天才とでも言おうか、almighty geniusとでも言うべきか。

わたしが思うに、同じ天才にしても帝王・将軍というなら、古代ローマのユリウス・カエサルあり近世のナポレオンありで、フリードリッヒ二世も同等クラスでありえようか。しかしこの男が他の二者に相違しているのは、カエサルもナポレオンも時代の要求に応えた将軍だったといえようが、フリードリッヒの場合はどうも時代を読み違えたように思える。彼がカエサル・アウグストゥスの再来を自身の出番と見誤ったのは、上述のように彼が歴史的な「居抜き」のシチリア島生まれだったことに加えて、天涯芸術的な天才だったこととも無縁ではあるまい。

「神聖ローマ帝国」と皇帝フリードリッヒ二世

そのフリードリッヒ二世が、長靴のような形をしたイタリア半島のつま先の、とってつけたようなシチリア両王国に生をうけ

たのは、12世紀も終わりを告げようとする1194年のことである。神聖ローマ帝国の皇帝ハインリッヒ6世と、皇妃の（シチリア両王国の王女だった）コスタンツァとの間に生まれた帝国の嫡子であった。この両親の婚姻はこの当時ハインリッヒ6世を擁するホーヘンシュタウフェン家が、王国のオートヴィル家の継承者断絶の危機につけこんでものした政略結婚の賜物である。オートヴィル家といえば、「ノルマンの禍」といわれ当時のヨーロッパ世界を震撼させた北方民族の一部族だったろうが、彼らは11世紀西フランク王国のノルマンディー地方からさらに南下して、ナポリ・シチリア地方を攻略し、サラセンを「居抜き」よろしく駆逐してここに王国を打ち立てたばかりの（1130年）ノルマン族の王家である。

シチリアに於ける彼の生誕はまさにそれ自体が歴史的かつは運命的だったといえる。というのは皇妃コスタンツァにとっての後嗣生誕の成否は、結婚後久しく彼女が身籠ることのなかった事実とあいまって、イタリア半島の政界においてはすでに一大関心事となっていた。当時の政界といえば、一方においてはメルセン条約以来この半島を版図としてきた「俗権」の神聖ローマ帝国がひかえ、もう一方には「教権」の代表たるローマ教会が、半島を二分する分離帯のような形で直轄領を縄張っている、これら二つの勢力のにらみ合いの場といえた。

このシチリアに神聖ローマ帝国の皇子が誕生するとなれば、これはもうローマ教会にとって悪夢以外の何ものでもなかった。なぜなら教権側は己の教皇直轄領が、アルプスの北にひかえるドイツ王国とナポリ以南のシチリア両王国の双方、つまり南北の神聖ローマ帝国による挟み撃ちとなりかねない、ゆゆしい恐怖におびえたのだ。今や教皇直轄領ローマは皇帝の侵略から防衛すべき領土問題の様相さえ呈していたのである。

こうして当時のイタリア半島といえば、上は皇帝と教皇による抗争にはじまり、下

はシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」よろしく、両家の不和にいたるまで、国も都市も団体も、家や個人を巻き込んでの、あらゆる人間・社会をめぐる利害得失の敵対関係は、あげて皇帝党（ギベリン派）と教皇党（ゲルフィ派）の対決に収斂した。何人もこの両党のいずれかに属さぬかぎり、生命や所有の安全は保障されなかった時代である。

このような世をあげての両党の対立抗争は、フリードリッヒ二世の祖父バルバロッサ（赤ひげ王）の治世下に顕現したとされるが、それも孫の時代となると両者の覇権争いは、今やおどろおどろしく血なまぐさい皇帝vis教皇による暗闘の様相を帯びていた。わが物語の主人公皇帝フリードリッヒ二世が活躍するのは、こうした泥沼のような俗権と教権による対決の渦中だったのだ。

もとよりその彼の生涯を運命づけたのは、ホーヘンシュタウフェン家の嫡子として、生まれながらに神聖ローマ帝国皇帝を約束され、生れも育ちもシチリア両王国内だったことから、彼がこの両王国の帝王の地位をも掌中に収めたことだった。このシチリア両王国に絶対君主制的統治の成功を収めた青年皇帝の心に、それまで夢でしかなかったカエサル・アウグストゥスの古代ローマの再生が、俄然現実のものと映ってきたとしても不思議ではない。彼の雑学的天才はシチリアという雑種の先進文明の坩堝のなかで、水を得た魚のように自由な泳ぎを保障した。

その自由な思想と行動の向かうところは、重ねていうカエサル・アウグストゥスのローマの再生であったから、彼が敵するふたつの相手方との戦いはその夢の実現のため不可避的であり運命的といえた。その一つの敵は俗権に真っ向対峙した教権ローマ教会だが、もう一つの敵は祖父のフリードリッヒ一世（バルバロッサこと赤ひげ王）以来さんざん手を焼いてきた、ロンバルディア地方（北部イタリア）の新興コムーネ群（ミラノ、ヴェネツィアなどの自治都

市)であった。皇帝はおそらく死の間際まで、このふたつの敵に対する戦いなら最後の勝利を信じていたのではないか。彼の究極の野望はイタリアに限られていたとは思われず、古代カエサル・アウグストゥスの帝政をもくろむ限り、目指す版図のなかにフランスやスペインが入らないはずはなかったろうから。

皇帝フリードリッヒ二世は戦い半ばで病に斃れるまで、戦いというたたかいによく戦い、大きな勝利をものしたこともあったが(コルテノーヴァの戦い)、手中に完全な勝利を収めるというには持ち時間が少なすぎた。不幸にして彼の死は、同時にホーヘンシュタウフェン家の終焉でもあったから、この時点でいえば俗権(皇帝)は教権(ローマ教会)の前に一頓挫したことになる。これがイタリア・ルネッサンスの夜明け前であった。

前掲の史家カントーロヴィッチは「皇帝フリードリッヒ二世」の中で感慨をこめて言う。

『シュタウフェン家の支配が後まだ半世紀続き、シビュラ(私註:巫女)によって約束された待望の第三のフリードリッヒ(同註:フリードリッヒ二世に劣らぬ有能な後嗣フリードリッヒ三世が現れたならという仮定)が出現していれば、ヨーロッパに再び「神聖なるアウグストゥス」その人が、ローマの門を通り、祭壇にある自分の立像に香を撒き、生贄をささげる光景を目のあたりにしたことであろう。シュタウフェン家はヨーロッパに現れた最後の「神々の一族」だった。』

因みにカントーロヴィッチが最後の「神々の一族」というとき、その神々は、一神教のキリスト教にとっては、まさにローマ時代の「異教の神々」を指すことは申すまでもない。ここに著者が明示するところのものは、当時の皇帝フリードリッヒ二世が世界の脅威と目されていた、その真実は、彼が「反キリスト」(反教皇)だったという

ことであろう。

そういえば皇帝フリードリッヒ二世は、しばしば満州国の愛新覚羅・溥儀よろしく「ラスト・エンペラー」呼ばわりされる。そう彼が呼ばれるのは、古ゲルマン族とその後裔たちがこの皇帝に託した千年の夢……カエサル・アウグストゥスの古代ローマ帝国の再生……が潰えたとき、彼こそはローマの「最後の皇帝」に相応しい、と考えたからに相違ない。畢竟するに「神聖ローマ帝国」といった名称からして、その現実とは実体とは夢のようにかけ離れていながら……ローマは遠くなるばかり……、なんと19世紀にいたるまで、そのまま用いつづけられてきたのには、そこにこの最後の皇帝フリードリッヒ二世の遺恨が込められていたからであろうか。「神聖ローマ帝国」は名実ともに永くこの皇帝の魂を鎮めてきたのかもしれないのである。

その皇帝フリードリッヒ二世が没してからおよそ5百有余年の後、ところ変わってフランス革命の物語だが、18世紀も最晩年あの革命の化身のようにして現れ、最後はテルミドールの反動で断頭台(ギロチン)の露と消えた、非業のロベスピエールのこともここに付記しておこう。彼はおそるべき恐怖政治の領袖として歴史に悪名をとどろかせはしたが、なんとその彼もまた古代ローマの復活を夢見ていた男だといわれる。

しかし古代ローマとは言いながらロベスピエールが夢見たものは、カエサル・アウグストゥスの帝政ではなく、それより古の(紀元前<B. C>5世紀~同3世紀にわたる)眩しいばかりに栄華を誇ったあの共和制だったことは言うまでもない。とまれ、こと志とちがって彼が掌中にしたのは独裁政治以外の何物でもなかったことが、ナポレオンの悲劇とともに思い起こされたのである。古代ローマこそは後世のドイツにとってもフランスにとっても、夢見る先が帝政か共和制のちがいこそあれ、ひたすら憧憬と讃仰の的であったことに変りはなかったというべきか。

(次号につづく)

会員寄稿文

八十歳の追憶

清 水 浩



今年の九月、満八十歳を迎えました。長谷川さんのお誘いを受け、何を書くか考えた末に、敗戦の近づく数年の身辺に触れることにしました。読んで頂ければ幸いです。

「その手は食わなのハマグリや!」とぼくはよく言ったものだ。世相が厳しくなってきた、大人の空気が伝染していたのかも知れない。或いは、桑名を食わないと言う掛け言葉の語呂の良さに魅力を感じ、蛤は食べ応えのある旨いもんや、と感じる楽しさがあったのかも知れない。今のJR名古屋駅から西南の方向へ約20キロほど隔たった「桑名」は今日でも蛤が名産品だが、ぼくがそれを知っていたかは不明である。

ぼくの住処は、大阪万博が催された吹田市内にあり、昭和の初め頃造られたという京都と大阪を結ぶ輸送の幹線、「産業道路」から割合に近く、条里のように分岐した道筋のひとつに位置していた。家の左隣には後にNHKの初代婦人局長になったJOBK勤務のお姉さんが母親と一緒に住んでいて、右隣のご主人は大阪商船(株)外国客船課の課長さんであったと知ったのは後年である。奥様に声をかけられ居間に上がり込む

と、珍しいお菓子が戸棚から現れ、貧しい食卓が常であったぼくは喜色満面になった。

向かいは近所では唯一例外のお屋敷風で、ときに庭にボールが落ちると、取りに行くのに勇気がいった。ここにはもの静かで眼鏡をかけた、ぼくらにはおばあさんに見えるご婦人がいて息子二人と住んでいた。年上の兄さんが道を一人で歩くこともあったが、背が高くヒョロッとした感じで、誰とも目をあわさず無言だった。不気味というより、ノロマな感じがした。弟のほうはいつ頃だったか、金ボタンのついた白い軍服を着ているのを外で見かけ、海軍士官だとわかった。羨望の眼差しで見たぼくは普通の軍国少年であった。

同じ道筋の或る程度のまとまりを持った戸数(十数軒?)で隣組が編成され、雑多な人々が暮らしていた。そのような環境はこどもの成長にプラスであったと思う。

すばしっこい権太(やんちゃ、とも言った)がいて、遊びの小世界は豊かだった。ベッタン、独楽回し、石蹴り、ビー玉(ぼくらはもっぱらラムネと言った)、探偵ごっこ、かくれんぼ。生き物では鬼ヤンマやトンボ取り、少し歩けばナマズ、ドジョウが近在の田地や溝で捕えることができた。紙芝居は毎日来た。面白ければ大人も見っていた。夏には通りに床几を出し、涼みながら将棋する人もいた。早熟そうな子がいて、受け売りだろうが、大人の怪しげなことを得意げに教える者もいた。関西風なのかよく分からぬが、天皇や教育勅語を笑いの種にして面白がる子もいた。

昭和19年、ぼくが体調不良になり微熱が取れないので、母親に連れられて阪大病院

に行き、肺門リンパ腺炎と診断された。戦前戦後、肺病は不治の病と恐れられたので、両親の命令で福岡県の父母の郷で、療養することになった。

まず最初は田原村の母親の郷に行った。ぼくの祖父は既に亡くなり、叔母は教員の婿養子を取って家を継いでいたが、先祖の何町歩かの稲田の不在地主であり、屋敷内は千坪を越える広さで、叔母の手で維持されていた。柿や梅や桃の成る樹、四季の草花、池畔の家鴨、石垣の苺、少々の耕作畑などがあり、療養先の環境としては恵まれていたと思う。

叔父が貸してくれる楠木正成や和気清麻呂の本を背伸びして読みながら、ぶらぶらして過ごす中、月に何回か叔母に連れられて親戚筋の内科医に通った。3ヶ月で回復が認められたので、夏ごろから父方の祖母の家に移った。

昔は田川郡のかながわ金川村といい、田川市に編入されていた。祖父の名は又三郎、直方線の「楠駅」の真ん前で、石炭産業の発展を背景に事業を伸ばし、多数の使用人がいたことも幼児のぼくは見ている。今私が思うには戦時の統制経済の中で状況が一変し、70歳を超えた祖父は隠居の身だった。祖母は気が利く優しい人で、剛直な主人の良い伴侶のように孫には映った。煙草販売だけは続けていた。

祖父は博多の天神に近い警固神社の前で長く商いを営む裕福な家で育ったが、三男なので本家を出て、遠賀川の支流の川沿いにある金川村に生業の拠点を置いたのだった。

7月18日に東条内閣が総辞職したとき、その写真が翌朝の新聞に出ていて、祖父のそばに偶然ぼくが座っていたので、「とうとう東条さんはお辞めなしゃったか・・・」と呟く祖父の声を耳にした。子供にも戦争はこの先、どうなるのだろうと不安に思う影が忍び寄っていたのだろう。その前後に、

近所の家で出征兵士の三浦一等兵が戦死して遺骨になって帰って来た通夜を覗いた。皆悲しげだった。

また、ぼくが家の二階で夜の布団にもぐっていると、駅員が構内の引っ込み線で貨車の振り分けをしているのか、ドミノ倒しのように衝突して発する連結器の音響が、夜の静寂に尾を引くのが心に浸みた。

健康が回復したので、父が迎えに来て秋には吹田の家に戻った。朝日新聞の第一面の見出しについ目が行ったが、多分その頃なら日本軍の特攻隊攻撃の開始や、米機B29による最初の東京爆撃のニュースが伝えられていたのだろう。

戻って来た吹田第三国民学校3年の堀見先生のクラスでは、「お話しの時間」に生徒が手を挙げ、名指しされると教壇に上がって思い思いのことを自由に喋った。ぼくが指名されることが多く、時間制限もなかったので、読んだ本や映画のことを長々と語ったと思う。先生が笑いながら聞き入っておられたので、調子がいっそう上がったのである。

昭和20年に入ると米軍の空襲はいっそう熾烈になり、上級生が班長となり揃って登校したが、警戒警報はすぐに空襲警報に変わり、急いで頭巾をかぶり下校した。夜間空襲は回数が増え一夜に5度も防空壕に入った記憶も残る。3. 13の大阪大空襲の夜なのか、吹田でも焼夷弾が金切り声をあげて降ってきた。近所では類焼は免れたけれど。(未完)



会員寄稿文

インド雑感 - 8
インドの留保 (Reservation)

高 尾 勝

Modi首相のお膝もと、Gujarat州で8月25日、留保枠適用を要求する1派が暴動を起し、

中央政府は暴動鎮圧予備軍を急遽Delhiから空送して、ことなきを得た一幕があった。

この留保枠とはなんだろう？

Reservationとは、憲法、制定法、地方自治体の法、規則、条例に依拠して、一定枠を割当てると云う積極的手法(a form of quota-based affirmative action)であり、定義上弱者救済の色合いは無いが、現実には弱者救済の手法になっている。

インドでのReservationの歴史、変遷と社会の対応、問題点、などを概観する：

1. 歴史と背景

1933年、時の英国首相Ramsay Macdonaldがムスリム、シク、ダリット（不可触民 Dalits）,

インド人キリスト教徒、などインド社会の四種姓制度*から疎外されている階層に、社会的認知（The Communal Award）を賦与した。Awardに、Mahatma Gandhiは反対、Dr. B. R. Ambedkar**は賛成、様々な議論を呼んだが、当然の事だが少数派社会からは歓迎された。両首脳妥協でヒンズー社会の中でDalitsが一定の地歩を認められたが、ムスリム、シクは未だ埒外に残された。

*バラモン（僧）、クシャトリア（士）、ヴァイシャ（商）、スードラ（農）

** Dr. Ambedkar: Dalit出身、インド憲法起草者で初代法相。

1891年、Travancoreでの州政府職員募集で「土着人以外」と云う注釈に対し、土着人留保枠要求が出た。1901年にKolhapur州（現Maharashtra州の中枢部）にnon-Brahmin、下層階級に対する初めてのReservationsが藩王Chatrapati Shahu Maharajによって導入された。

1947年の独立の前後、紆余曲折を経て憲法16(4)、29(2)及び46条が、弱者の権利と救済、及び社会的不正義からの保護を謳っており、1982年に具体的に両カテゴリーの弱者に公共職場と公立高等教育機関への留保枠を設定した。

Scheduled Castes (SC, 救済対象カースト)

15%

Scheduled Tribes (ST, 救済対象部族民)

7.5%

このSCsのことをDalits（不可触民）と称するが、インド下院、多くの州議会、でも留保枠があり、現在の下院：総議席545議席の構成は下記の通り；

大統領推薦学識者 2席

選挙対象席 543席

内、84席（15.47%）SC/Dalits

47席（8.66%）ST/Tribes

各州のSC・STの人口に応じて留保枠が配分される。

1979年、下層階級の社会的状況と教育状況の調査の為、B.P.Madalを長とするMandal Commissionが組成され、1980年に426頁の報告書を時の首相Indira Gandhiに提出したが、彼女は握り潰した。10年後の1990年8月7日に中道左派政権、V. P. Singh首相が報告書内容の実施を発表して、内容

が詳らかになった。その結果が中央政府の
下記留保枠になっている；

Scheduled Castes (SC)	15.0%
Scheduled Tribes (ST)	7.5
Other Backward Classes (OBC)	27
合 計	49.5%

Mandal委員会はOBCsとして知られる
sub-castesの総数には触れなかったが、
1930年の国勢調査資料を用いて1,257コ
ミュニティーを新たにBackwardに組み入
れ、OBCs人口は総人口の52%と推定した。
2006年調査の、Backward Classリストは
2,297コミュニティを記載している。

最高裁は、総留保枠が50%を超えてはな
らないとしたが、現実にはカースト、宗教、
性、などを留保対象にして50%枠を超える
留保枠を設定した州も幾つかある。

V. P. Singh首相発表の翌日から、逆差別
であるとして実施反対の学生中心のデモが
大都市で始まり、デリーでは学生の焼身自
殺事件も発生。階級対立の暴動事件が燎原
の火の如く全国に広がって数日間続き約
2000人の死者を出した。

2. 現在の問題

V. P. Singh首相発表当時、下層階級の多
くは初等教育の普及も捗々しくない状況で、
高等教育に進学する者は極めて少なかった
ので、学生たちが危惧した公共高等教育機
関への入学競合或いは中上級官公吏への就
職競合は現実に問題を起さなかった。

然しながら、インドの経済的発展が下層
階級の経済的余裕、上方志向、を齎して来
ており、教育も普及してきている。亦、
Modi首相が少年時代に鉄道駅ホームで紅
茶売りをしたOBC出身であると公表し、イ
ンドの人口の半分近くを占める有力5州の
州首相はOBC出身、今後も州首相に就こう
としている人達はOBCsかDalitsであり、出
自を無条件に卑下する昔の雰囲気は消えつ

つある。

州政府が定める留保枠は地域特性を反映
しており、50%を超えるものもあると述べ
たが、その例を幾つか挙げると；

Tamil Nadu州

SCs枠18%、STs枠1%、カースト・
ベースの留保枠計69%、
人口の87%が被適用者

Andhra Pradesh州

SC/ST/OBC以外に、女性など受益
幅広く留保枠合計66%。

教育機関及び政府職場は25%留保
(STs/15% , SCs/6% , Muslims/4%)

インド東北部の諸州、

Arunachal Pradesh, Meghalaya,
Nagaland , Mizoram

州政府職場80%for STs

Modiの12年間の州首相統治で 経済・社
会面で大きく飛躍し、‘Gujarat Model’ と
全国的に持て囃されたGujarat州で、冒頭の
暴動発生は逆差別の矛盾暴発と云えよう。

1990年のV. P. Singh首相の発表の5年前
の1985年に、Gujarat州とMadhya Pradesh
州は夫々州独自の留保制度を設けたが、
Gujarat州では有力なPatel氏族などの反対
で暴動になっている。Patel氏族は州人口
6,200万人の12%を占め、州政治・経済の面
で極めて優勢なグループで、州公職の約
30%を占め現州首相Anandiben Patel女史
はModiの子飼いである。

今回8月の暴動は、医学及び工学カレッジ
への非留保対象者に対する入学枠がほぼ
30%に縮減し、政府の職員枠も同様、とし
て若者達が現状に反撥して、我々にも
OBCs資格を与えよと訴えた大集会が暴
動に転化したもので、Patel氏族が分裂した。
Gujarat 州政府は、州人口の27%を占める
ThakoresなどのOBCsと話し合い、当面落着
したが、今後のカースト戦争の懸念を内蔵

する。

Mandal 報告は Brahmin 支配に対する無条件の畏敬という伝統的風潮を破る契機を齎し、長期的に政治政党の消長にも大きな影響を齎してきた。ネール王朝と呼ぶように貴種を尊び、口先だけで下層階級から集票し下層階級出身者の積極的起用を怠って

[illegible]

會員寄稿文

～アジア地域統合の新時代と北東アジア地域協力の行方～
「AIIB、SCO、BRICS 開発銀行の現状とアジア地域構想のあり方」

中 川 十 郎

筆者略歷：

名古屋市立大学22世紀研究所 特任教授
国際アジア共同体学会 理事長
日本ビジネスインテリジェンス協会 理事長
東京経済大学経営学部・大学院 前教授
愛知学院大学商学部 元教授



2015年はアジアの時代躍進元年となる。東アジアのASEAN(東南アジア諸国連合)、中央アジアのSCO(上海協力機構)、さらにBRICS(有力新興経済国)などが

世界経済の表舞台に登場し、世界の政治、経済上かつてない大きな変化の年となる。

- ① アセアン経済共同体（AEC）が2015年末に発足。さらにアジアインフラ投資銀行（AIIB）も運営を開始。
- ② 2014年12月29日に中国が中央アジア開発のための「シルクロード基金」（資本金400億ドルは中国輸出入銀行、国家開発銀行などが拠出）を設立。2015年4月に

きた会議派の没落。宗教で国民を結び付けようとしたBJP/RSS内にも、L. K. Advaniに代表され、上層ヒンディーカーストの印象を与えるMandirと対抗するMandalが出現した。Mandalはカースト差を縮めようとするものだったが、新しいカースト分裂の芽を包含している。

パキスタンの水力発電所向け初の融資を決定。三峡ダム管理会社・三峡集団や国家開発銀行、世銀グループの国際金融公社（IFC）と共同で16.5億ドル（約2000億円）を拠出し、5年後の稼働を目指す。画期的なことだ。

- ③ さらに中国は「一帯一路」戦略で「陸のシルクロード経済帯」と「21世紀の海のシルクロード」構想により、中国からヨーロッパへの壮大な物流網構築を目指している。「インフラ投資」と「物流」の二本立ての21世紀の巨大なシルクロード経済帯、サプライチェーンが構築され、東アジア、中央アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパ諸国とユーラシアのグローバル貿易が一気に拡大する。

（「一帯一路」戦略の理論的な支柱は中国外交政策ブレーン北京大学国際関係学院長・王編思教授が12年に提言したものだという。）

- ④ 2015年6月29日にはアジアインフラ投資銀行（AIIB）の設立に50カ国が参加し、北京で合意、調印された。年末に銀行の活動が始まる。フィリピンなど7カ国は調印を見あわせた。だが年末までに調印すると見込まれる*。資本金1000億

ドル(約12兆円)。(ADB=1531億ドル)。アジアが75%、域外が25%。国内総生産(GDP)の規模に応じて配分される。中国の出資比率30.34%。中国は議決権の26.06%を握り、重要な案件で事実上の拒否権を持つ。2位のインドは出資比率8%台、3位のロシア6%台。日米は中国が拒否権をもつと批判しているが、米国スタンフォード大学のフィリップ・リプシー助教授は世銀も米国が16.7%と最大のシェアで常に米国から総裁を出し拒否権を持つ。IMFも米国が17.1%と最大シェアで、専務理事は欧州が独占している。ADBは日本15.7%と最大で、毎回日本が総裁を独占している。日米がAIIBを透明性がない、中国が主導していると批判しているが、この批判は当たらない。日米ともAIIBに参加し、世銀、ADBと協調融資するなど協力すべきだとの見解である。

AIIBの本店所在地は北京。初代総裁は中国の元財政部副部長・金立群氏が就任。理事会はアジア域内9人、域外3人で北京には常駐しない。

日米はAIIBが透明性に欠け、中国主導だと批判しているが金氏は元世銀の専門家をアドバイザーとしてAIIBに招聘することも考慮しているようである。日米ともAIIBに参加し、内部からの改革に協力するのが筋ではないか。この投資銀行は10年で8兆ドル(960兆円=アジア開銀ADB予測)という巨大な資金需要のあるアジアなどでのインフラ投資・融資に活用される。

ADBやWB(世銀)が融資できるのは年間せいぜい200~300億ドルでAIIBの活躍の余地は十分にあるとみられる。

*(調印を見合わせたのはデンマーク、ポーランド、クエート、南アフリカ、タイ、フィリッピン、マレーシア)

- ⑤ 2015年7月8~10日にはロシア中部ウファでSCOとBRICS首脳会議が同時開

催され、インドとパキスタンがSCO正式メンバーに同時承認された。インドとパキスタンが加盟すると、SCO加盟国人口は30億人と世界人口の40%を占める巨大勢力となる。BRICS新興経済国の中国、ロシア、インドのユーラシアとアジアの市場、経済連携が動き出し、中央アジア、アジアに巨大経済機構が出現する。SCOとBRICSの合同首脳会議で二大国際機関の協力が合意され、その結果、中央アジア、東アジア、西南アジア、アフリカ、南米での新興国協力がさらに促進されよう。SCOは2025年までの発展戦略も発表。経済、貿易、エネルギー、科学技術、文化分野での長期的な協力促進も討議した。中央アジア、アジアでの多国間大型プロジェクトが急速に進展するものと思われる。

- ⑥ SCOはSCO発展銀行、SCO発展基金、BRICSはBRICS開発銀行(本店上海、総裁はインドから)、BRICS外貨準備銀行の創設でも7月7日合意した。BRICS開発銀行(通称BRICS銀行)はBRICS 5か国の100億ドルの均等出資で資本金500億ドルで発足する。本店は上海。初代総裁はインドの銀行家カマート氏。任期は5年。今後、ブラジル、ロシア、南ア、中国の順に持ち回りとなる。世界銀行の新興国版だ。この新銀行は当初BRICS各国のインフラ投資などに融資する。AIIBとBRICS銀行が今後、ユーラシアをはじめとする新興国の諸プロジェクトを推進することになる。両機構が今回、戦略的関係強化を共同声明で打ち出したことは注目に値する。両銀行は今後、相協力して、これらの地域の膨大なインフラ整備に融資を積極化するものと見られる。

ロシアが主導し本年1月に正式に発足したユーラシア経済連合(ロシア、カザフスタン、ベラルーシ、アルメニア、キルギスの5か国)とSCOとの関係を強化することも決定した。SCOはベラルーシ

をアフガニスタン、イラン、モンゴル同様、SCOオブザーバー（準加盟国）に取り入れた。

BRICSは「上海協力機構」、「ユーラシア経済連合」の首脳も加え、15か国首脳の拡大首脳会議を開催し、結束を強化した。2016年には中国でG20会議を開催する。ここではさらにBRICS、SCO、陸と海のシルクロード戦略、AIIB、BRICS開発銀行、シルクロード開発基金などの活用についても具体策について会議が行われるとみられる。

- ⑦ 一方、中国は現在、拡張工事が行われているスエズ運河、パナマ運河に対応し、21世紀の画期的物流ルートとして脚光を浴びている北極海航路の開拓にも熱心である。日本、韓国と組んで、ロシアのヤマルLNG基地からの天然ガス運搬のためにLNG砕氷船3隻を2018年の運用開始を目指し、韓国大宇造船所に発注。さらに南米のニカラガと太平洋に抜ける運河建設のFeasibility Studyを開始した。中国はブラジル、ペルーと大西洋～太平洋をつなぐ高速鉄道輸送網の建設にも合意。世界最大の貿易国としてグローバル・サプライチェーン構築を目指し戦略的に動いている。中国はさらに中央アジアにおいて世界有数の石炭、銅鉱床を開発中で脚光を浴びているモンゴリアとの鉄道建設にも乗り出し、中央アジアでのインフラ・物流網建設、貿易拡大戦略を着々と進めている。

結論：

～アセアン経済共同体（AEC）、東アジア包括的地域経済連携（RCEP）と上海協力機構（SCO）との有機的連携強化こそ21世紀のアジアの時代の発展に必要～ 米国の国益、多国籍企業の企業益を狙う環太平

洋経済連携（TPP）は日本の国益を考え、慎重に対応することが肝要だ。

AEC（アセアン経済共同体）、RCEP（東アジア包括的地域経済連携）とSCO（上海協力機構）、BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南ア）との東アジア、北東アジア、中央アジア、アフリカ、南米などでの連携強化に日本は尽力すべきだ。

2015年末には人口6億人のAEC(ASEAN

Economic Community = アセアン経済共同体)が発足する。21世紀に世界の製造センター、貿易センター、消費センターとして世界で最も発展するアジアでのAEC(アセアン経済共同体)と、石油、ガス、ウラン、エネルギー、石炭、銅などの鉱物資源の宝庫として脚光を浴び、物流やインフラの投資需要も大きく、急激な発展が予想される中央アジアのSCO（上海協力機構）諸国、さらにASEAN+3(アセアン10カ国+日本、中国、韓国)、RCEP (Regional Comprehensive Economic Partnership = アセアン10カ国+日本、中国、韓国+豪州、ニュージーランド、インドの16カ国)の「ユーラシア」、「中央アジア」、「東アジア」の3大経済圏を日本が結び付けて、21世紀に発展するアジア地域の尖閣島、竹島領有権問題、歴史認識問題などで関係が悪化している日本、韓国、中国、北方領土問題のロシア、さらに南沙諸島問題などで中国と関係が悪化しているフィリピン、ベトナム。基地問題を抱えている沖縄を含め、これらアジア地域でのアジア共同体構築を基盤としつつ、経済協力、文化交流、観光交流を通じ、戦後70年目の節目に、アジア各国が相協力してアジア地域に平和を構築する努力を傾注することが極めて重要である。日本が主体性を発揮し、一刻も早いアジア経済共同体構築へ尽力することが強く望まれる。

会員寄稿文

「ミャンマーに再び駐在することになって」

丸 野 純

<20年振りにミャンマーに>

2015年8月27日、私は、ヤンゴンインターナショナル空港に降り立ちました。実に20年振りのミャンマー訪問です。

実は、1992年4月から1995年3月まで、ヤンゴン支店長として、3年間、ヤンゴンに駐在していたのです。

その内、時間ができたらセンチメンタル・ジャーニーで、ミャンマーに行ってみたいとは思っていましたが、この年齢で、まさか仕事でミャンマーに駐在することになるとは――。

人生、何が起るかわからないものです。

飛行機を出て、空港ビルに続く通路を歩き、ビル内に入り、そして入国審査場へ。

「いやあ、懐かしいなあ〜！」と言うことは全くなく、「ここは何処？ 違うところに辿り着いてしまったのでは？」と心配になったほどです。入国審査を受け、荷物をピックアップし、出迎え口へ。出迎えにきた相手先に会って、車の待つ空港の外に出ました。「どうやら、間違いなくヤンゴンには着いたらしい。」しかし、懐かしさが全くこみ上げて来ません。

市内に向かう車中から外を眺め、必死に20年前の記憶を手繰り寄せるのですが――。「確かに、この道の曲がり具合は記憶にある。だが、知っている建物が全然ない。それより何より、この渋滞はなんだ！ これは、かつての経験など忘れた方がよさそうだな。」と悟った次第です。

私は、4年半前、“すき家”で名高いブラック企業「ゼンショー」を60才で目出度く？ 定年退職し、これ幸いにと4年半の惰眠を貪っていたのですが、今年の4月、幼友達から「純ちゃん（私の事）、働く気無いの？ ニチメンOBのK氏が雇われ社長やっている会社とオレの会社とローカルの3社でミャンマーで野菜の冷凍工場を建設中（来年3月操業開始予定）なの。」



現地に行ってくれない。」と言われ、「正面切って、“働く気ないの？” って聞かれると断りにくいよなあ。色々身辺整理もあるし、まあ、8月ぐらいからなら、行ってもいいよ。」と言うことで、今回のミャンマー再駐在となった訳です。

<ミャンマーの首都はネピドー？！>

私が住んでいる（建設中の工場がある）のは、ヤンゴンから北に約400km、ヤンゴン（ミャンマー第一の都市）とマンダレー（ミャンマー第二の都市）の間にあるネピドー（Nay Pyi Daw）です。イメージ的には、東京、大阪を南北（大阪を北に）にして、名古屋当たりと言う感じでしょうか。

皆さんは、ミャンマーの首都がネピドーだって、知っていましたか？ 正直、私は知りませんでした。

2003年の夏ごろから、軍用地だったところに建設を始め、2005年中頃に移転計画が明らかになり、同年11月から政府が移転し始めて、2006年10月10日に首都と宣言した由。

遷都の理由は、米国にイラク戦争同様の侵攻を受けた時、ネピドーのほうが防衛上有利だとか、当時の元首タン・シュエ上級将のお抱え占星術師が決めたとか、色々言われていますが、本当の理由は不明です。

まっ、軍事政権ですから、「ここに遷都するから、住民は退いて。」

役所・役人は、XX月からネピドーに移転！」と決めれば、それで済むわけです。電

光石火。早業です。荒業です。

沖縄の基地移転、日本の遷都もかくあるべし！とは言いませんがー。

写真は、東京ドーム70個分の広さを誇る“国会議事堂”です。

目の前には、片側10車線（間違いなく、滑走路）が通っています。

写真を取った日は日曜日だったので、私の車以外には1台も車が走っていませんでした（平日でも、ほとんど走っていませんが）。ヤンゴン市民には、“ゴーストタウン”ならぬ“ゴーストシティー”だと揶揄されています。

それぞれの役所は森の中にあります。ネピドーは、静かで、何より渋滞のないのが素晴らしい？

それに比して、今の旧首都ヤンゴン（昔懐かしランゲーン）の渋滞は酷い。30年前のバンコクを彷彿とさせます。何しろ、人口250万人の大都市なのに、バイクの乗り入れが禁止されており、本当にバイクが一台も走っていないのです。

車、車、車です。

この渋滞を経験すると、確かに首都移転もやむを得なかったのかなあとありますが、それにしてもー。

<旧ニチメンのスタッフと>

今回のミャンマー行きを決めた理由の一つに、私が駐在していた時（20年前）にニチメンで働いていたスタッフが、まだ双日で働いていると聞いていたので、是非彼らと会って、旧交を温めたい、と言うことがありました。



上が、双日の事務所の会議室で撮った写真です。

左からウー・ミョー・ミン、チー・チー・カイン、丸野、スウィティー、ウー・ティン・ウーです。

「懐かしいな。まだ、アイツ元気なのか!」と思われる方々もおられると思います。

みんな、私が駐在していた時のスタッフで、まだ、双日に在籍しています。（ウー・ティン・ウーは得意先に転籍）

ウー・ミョー・ミンは、現在66才にもかかわらず、Senior Project Coordinatorとしてがんばっています。チー・チー・カインは、Accountantだった故ウー・タン・ティンの娘で、当時は臨時雇いでした。スウィティーさんとタイピストで当時から年齢不詳でした。

こうやって集まってくれるのは、嬉しいこと、ありがたいことです。

かつてのお得意さんとも再会を果たしました。

<ミャンマーの政治情勢は>

さて、皆さんが一番興味を持っているのは、選挙後のミャンマー情勢だと思います。今、この原稿を書いているのが、選挙が終わってから約2週間後のことです。下手な事を書くと、今、この原稿を読んでいる方々から、「お前の分析はまるでトンチンカンじゃないか」という事になってしまうので、今後の事は書きません。

選挙については、前々から、遷都の一件でも分かるように軍時政権はやりたい放題でしたから、まともにやればスー・チーさんのNLDが勝つに決まっていると思っていました。

流石に、軍時政権側も1990年の選挙（まともにやって負けて、びっくりして軍が政権に居座ってしまった）で学習しましたから、今回は買収、恐喝、多重投票、投票箱のすり替え等々、何でもありで勝つのだらうと思っていたのですがー時代は変わって、そんな事はできなくなったのでしょうか。

我々が親しくしている農業灌漑大臣（元将軍）も、元農業灌漑省の前次官（「今度、当選したら副大臣だ。」と呑気にはしゃいでいた。）も、当然のごとく落選しました。

今のところ、町は何事もなかったように日常が続いています。

テンセイン大統領に近い筋は「まあ、お手並み拝見」と言っています。

投票当日、長蛇の列の投票場に現れたスー・チーさんは、みんなの歓喜の輪の中をズンズン前に進み、さっさと投票をして帰ったそうです。テイン・セイン大統領は、同じようにみんなに歓迎されましたが、きちっと列の最後尾に並んで、投票したそうです。スー・チーさんは、何と言っても、“建国の父”アウン・サン将軍のお嬢様ですから。NLDも、スー・チーと言う旗を担いでいるだけで、中はバラバラですから、内部分裂も危惧されるところです。

<工場内で赤ちゃん生まれる>

建設現場である工場の中で赤ちゃんが生まれました。



写真がお母さんと赤ちゃんです。後ろの写っている“家？”で生まれたそうです。彼らは、家族で建設現場を転々としながら暮らしていて、わが工場建設現場内でも、小さな子供たちが遊んでいます。流石に、建設現場内で赤ちゃんが生まれるのは結構珍しい事で、“建設現場で子供が生まれると縁起がいい。事業が成功する。”と喜ばれるそうです。私も、祝い金として2万5千チャット(2,500円)を渡しました。

きっと、こんなところで生まれたんだから、余程生命力が強いに違いありません。

元気に育って欲しいものです。

目出度し。目出度し。

<スーチーさん齢(よわい) 70！

色気はないが、やる気は満々！>

スーチーさんは、最近、「私は選挙で選ばれた党の党首だから、私は大統領より上になる！」と言っています。憲法に、“外国人が配偶者(あるいはだった)人は大統領になれない。”(要するに、スーチーさんは大統領になれない。)と書いてある由。だから、彼女は、「大統領より上になる」と言っている訳です。大統領より偉い人って何て言うんだろうと色々考えてみましたが、「女帝(Empress Regnantと言うらしい)」という言葉しか浮かびません。

ー12月4日寒くなって来た首都ネピドーにてー



添付の写真は、建設中の工場の様子です。人がコンクリートミキサーに砂利、水、セメントを入れて混ぜて、それをトタンに吐き出し、人がシャベルでバケツに入れ、そのバケツを人が奥にある建屋に運び、コンクリを打っています。建設予定がずれ込むのもしかたがないですね。

《編集部 註》

このミャンマーにおける この野菜プロジェクトは、11月21日、日経新聞Asia-Biz欄に8段抜きで紹介されている。『ミャンマーベル社 冷凍野菜を日本に初輸出』として。

会員寄稿文

自分史のことなど

平 岡 昭 三



93歳の望月昌徳さんと並ぶ筆者

みなさんこんにちは！ お金拾おか、財布拾おかの平岡昭三であります。(笑)

さて、人間は皆んな自分がどんな人間だったのか、一生経ってみないと、なかなか解らないものであります。

私も今年の春、88歳の米寿の祝いを頂きましたが、この年になってやっと、自分がどんな人間だったのか、やっと解って来たような気が致します。

私の性格や信条は「人の余りやらないことをやる」と云うことだったように思います。まあ云うなれば「天邪鬼か一匹狼」だったと云うことでありましょう。(笑)

例えばニチメン時代には20台の若党の分^{ブン}際^{サイ}で、社長に直訴状を書いて出して、会社に社長室を作らせました。之は、それまで個人商店的だった古いニチメンを、近代的組織に脱皮させた、一つの契機になったように思います。

それから又、熟年になってからは、例えば国際コンソーシアムを組んで、伊藤忠や兼松などを引き従えて、深海底のマンガン

ノジュールの開発をやったり致しました。

そして定年後には、道州制実現のための、政治の市民運動のリーダーをやったり、老人ホーム慰問のボランティアで、一人芝居を各地で200回程やったりして参りました。

それから又昨年には、自分史の本を自費出版致しました。百万円で1千部発行致しました。そのうち800部をいろんな方に贈呈させて頂きました。何の取り得もない私の出版でありますから、せめて本当のことを書くよう努めた積りであります。

この自分史に対しては、双日の社長からは、長い手紙を頂きました。ある先輩からは「たとえどんな些細なことでも、自分のことを書くのは難しいもの、よくぞ書いたと感心した」とのお言葉を頂きました。又某君よりは「ニチメン始まって以来の快挙だ」と云われました。(之はちょっと誉め過ぎであります。)(笑) その他「大変面白かった」とか「一気に読了した」とか「ニチメンの裏面史がよくわかった」などのコメントを、300名程の方々から頂きました。

未だお読み頂いてない方で、ご興味のある方や、もう一冊欲しいと云う方には、未だ大分ありますので、喜んで贈呈申しあげたいと存じます。お気軽にお声をかけて下さい。それから又、皆様も夫々面白い話やスリリングなお話しをお持ちのことと思いますので、大いに自分史をご出版されることをお勧め申し上げます。

以上であります。私は今ではご覧の通り老醜無残であります。老兵は只、消え去るのみであります。どうもご清聴有難うございました。(笑)

ニチメン“機友会”

蒲 澤 信 男

H27年10月17日（土）市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷、私学会館にて第11回ニチメン機友会が開催されました。

私自身はしばらく海外におり初めての参加でした。参加者52名（昨年62名）、年代は50代から80代後半、森江健児君（S50年入社）の司会。まず恒例のニチメンマンドリンククラブ総勢18名のバックグラウンド、ニチメン社歌のもとで始まり、水庫会長の挨拶、ここ1年の物故者への黙祷。

野村喜久雄元副社長には辻井さん、高木享一さんには木皿さんよりそれぞれの生前のエピソード等思い出が披露されました。辻井さんに依ると野村さんの最期は正に”ピンコロ”だったそうで、自ら病院に入院すると言われ、数日入院するなかである日息子さんと昼食をご一緒され、その夜に亡くなられたそうです。

野村さんを存じ上げる方々から、”野村さんらしい”とつぶやきが聞こえた瞬間でした（享年90歳）。

その後丸山元副社長の乾杯の音頭で宴がスタート。方々で久々の再会、懐古談、近況等を楽しむ沢山の輪が見られました。また、宴さ中、丸山元副社長の”千曲川”熱唱もあり、全員で”青春時代”も歌いました。

最後は古家章さんの関東一本締めでやや名残惜しいお開きとなりました。

ニチメンを卒業して、何年か経ち、出席の皆様も色々な想いを抱いて参会され、何かを感じて帰られた事と思います。

私個人で言えば、入社した時同じ課に居た同い年の女性と40年振りで会う等懐かしい人と

沢山お会い出来ました。入社した頃、隣の部で大きな声で部下を叱咤してカッコ良かった水庫当時課長、20代にルーマニアでお世話になった福富元ブカレスト所長、30代DD駐在時お世話になった旭サナックにおられた辻井さんに数十年振りでお会い出来て非常に良かったと思っています。一方、入社した頃随分麻雀の手ほどきを受けた与義さん、20代後半にワルシャワでお世話になった高木（亨）さんは他界され、お会い出来なかったのは大変残念でした。

オムロンの元社長の立石義雄さんという方が人が楽しいと感じる要素は①非日常性②挑戦性③連帯性④没入性と言われてました。特に①の非日常性については私も予てより思う所あり、この度のこの機友会に参加して大いに“非日常性”をEnjoyさせて頂いた次第です。

来年は建機車両部の担当で10月15日（土）に機友会開催予定の由ですが、また皆様とお会い出来るのを楽しみにしています。

最後に今回産業機械部担当幹事だった林正弘様始め幹事諸兄に深くお礼を申し上げます。



後列左より：

大曾根、宇津木、保科、池永、岡村、
林(正)、蒲澤、久本、川西、山岸

前列左より：

林(幹)、稲治、辻井、丸山、朝倉、
永倉、溝江

後列左より：

木皿、吉内、木寺、永井、岩村、
川田、中原、森江、山邑、北川、
三原、今井、平川、中谷

前列左より：

杉本、川西(啓)、福富、吉本、橋爪、
本田、泉



後列左より：

豊間根、佐藤(統)、倉原(石川)、
吉田(斎藤)、小堀

前列左より：

石川(明)、大羽、殿岡、南部、
藤原(深井)、古家、高橋、杉浦



ニチメンマンドリンクラブ

第10回機友会 2015年10月17日 土曜日 於：アルカディア市ヶ谷（私学会館）伊吹の間

出席者名簿

（あいう順・敬称略）当番幹事：産業機械部

1	朝 倉 重 道	21	杉 浦 房 枝	41	保 科 孝
2	池 永 浩	22	杉 本 幹 雄	42	本 田 務
3	石 川 明	23	高 橋 要 司	43	丸 山 修 作
4	泉 伸 夫	24	谷 道 夫	44	水 庫 博 夫
5	稲 治 寿	25	辻 井 準 一	45	溝 江 博 三
6	今 村 隆 夫	26	土 田 博	46	水 堀 勤
7	岩 村 久 雄	27	殿 岡 敬 久	47	三 原 均
8	上 田 吉 彦	28	豊間根 政 行	48	森 江 健 児
9	大 羽 陽一郎	29	永 井 存	49	山 岸 正 雄
10	岡 村 宏	30	中 原 正 紀	50	山 邑 陽 一
11	大曾根 弘 之	31	中 谷 宣 英	51	吉 内 健 次
12	宇津木 長	32	南 部 捷 郎	52	吉 本 邦 晴
13	蒲 澤 信 男	33	林 正 弘	NMC	福 西 郁 郎
14	川 田 英 之	34	林 幹 夫	NMC	舎川(南雲)恭子
15	川 西 勲	35	橋 爪 覚	NMC	林 光 夫
16	川 西 啓 三	36	久 本 紘 一	NMC	入 江 隆 史
17	木 皿 重 正	37	平 川 真 淳	受付	倉原(石川)理香
18	北 川 幸 雄	38	福 富 直 明	受付	小 堀 裕 子
19	木 寺 厚 二	39	藤原(深井)希代	受付	吉田(斎藤)順子
20	佐 藤 統 次	40	古 家 章		

旧 食 品 部 の 会

幹 事 井 田 龍 夫

秋晴れの東京、10月24日（土）12時半、いつもの場所、丸ビル5階のスペインバル「ブラッスリー BUZZ」にて第4回旧食品部の会を開催致しましたので、その模様を少しばかりご紹介させていただきます（男性15名、女性9名、計24名の参加を得ました）。

- ・開会に先立ち倉持さんから10月7日に心不全で逝去された渡利元社長の報告と黙祷。
- ・笠井さんの開会挨拶。時代の流れに乗り遅れないよう一生勉強を！との訓示に、皆さん現役時代に戻ったかのよう。そうさそうさというように頷く人、神妙に首を垂れる人等々でその反応を見ているだけでも（不謹慎ではありますが）man watchingの面白さがあります！ 流石笠井さんは永遠のボスであります！
- ・続いて高瀬さんの音頭で乾杯。進行役の突然の振りに高瀬さんも目を白黒・・・取敢えず乾杯！とお茶を濁した後は、1年ぶりのお喋りタイムに。
- ・途中で今回インドネシアより一時帰国の小山さんから挨拶。小山さんの外見は全く変わらずダンディなんだなあ～。
- ・これを皮切りに海外・遠隔地組の皆様からの近況報告を「声」が抜群に良い紅林さんが代読（適当に脚色）。写真と合わせファイルを回覧。紅林さんの軽妙な話し振りも天職ですね！
- ・あとは自由に歓談しながら席も移動したりして旧交を温め合い、予定を15分オーバーして14時45分にお開き。
- ・そのまま同フロアのcaféに移動し一次会の余韻を残したまま2次会、中締め。
- ・まだまだ話が尽きない（飲み足りない、食べ足りない？）12名が八重洲口まで移動、懐かしの「グリルシャトー」の開店を待ち本締めの3次会。20時に東京駅で解散。

この会は旧ニチメン食品部が1974年前後の黎明期を経て、色々な困難を克服しながら発展していった約20年間の間に苦労を共にした方達が多く参加されています。その為、仲間意識が強く、そして包容力の大きい旧上司の方々に恵まれたお蔭で、居心地のいい集まりになっているのだと思います。

これからも1年1回のペースで集まりを続けていきたいと思っています。

最後に、参加された方達へのThanks mailで本文を締めくくりたいと思います。

皆様

24日にいつもの場所でお集まり頂きありがとうございました。いつものように話が弾み、2次会、3次会と夜の8時頃まで話が尽きませんでしたね。

3次会でも12名の方が参加されたと後からお聞きしました。

それだけ集まりやすい会で、皆さん楽しみにしている会なのだと改めて感じ入りました。

来年もいつもの場所（もしかしたら違う場所になるかもしれませんが・・・）お会いできる日を楽しみに、皆さんお元気でお過ごしくくださいますようお願い申し上げます。

今回参加できなかった皆様、又海外でご活躍の皆様も是非とも次回にご参加頂けますよう、心からお待ちしております。



後列左から 益田、高山、奥本、和田、倉持、遠山、大塚、藤澤、井田
後列2列目左から 小山、高橋、高田、高瀬、笠井、大村、松島、池谷
前列左から 紅林、大林、佐藤、豊田、高山、
最前列 賀川 撮影者山口一郎

第3回ニチメン・シカゴ会開催

五 月 女 穰

夏らしい天気となった6月13日に東京青山の青学会館で第3回のニチメン・シカゴ会が開催されました。

米国ニチメン・シカゴ支店は、1960年に開設され2003年4月に閉鎖されましたが、その間約40年に亘り合計103名のニチメン社員が駐在しました。103名のうち、既に鬼籍に入られた16名、及び体調不良等諸般の事情から予め欠席と判明している方々を除き、今回85名の元駐在員に案内状を発送し、最終的に31名の方が出席されました。当日他の予定と重なった方が多かったようで、残念ながら予想した人数を下回る結果となりました。

会は先ず4月に逝去された坂上さんを含む16名の物故者に対する黙祷に始まり、続いて田中さんによる開会の挨拶があり、会がスタートしました。

最初に今回出席者の最長老である三分一さんよりシカゴ支店創設時の思い出話をして頂きました。その中で予定した顧客からの入金が遅れた為資金繰りに苦労し、給料の支払いに頭を痛めた話には皆さん神妙に聞き入っておりました。その後岩田さんの発声による乾杯と続きましたが、

流石約20年に亘りアメリカ中西部のシカゴ、西部のロスアンゼルス、南部のヒューストンと米国内の異なる地域に駐在されただけあって、乾杯に先立っての地域比較論は、アメリカの広さを改めて認識する上で大変興味のある内容でした。

しばし歓談の時間を挟み、今回所用により出席出来なかった最長老辻井さんよりのファックスが米田さんにより紹介されました。正に流麗達筆、盛会を祈念するとの心温まるメッセージでした。

名古屋に本社がある富士機械製造は、シカゴにアメリカの拠点を置き、ニチメン・シカゴ支店と共に発展を遂げて来ましたが、今回同社の元シカゴ駐在員木村さんが初めて出席されました。彼は2度に亘り33年間シカゴに駐在し、まさに人生の半分をシカゴに捧げたことになり、ニチメンと歩んだ数々の思い出話をして貰いました。

引続き今回初めて出席された牧浦さん、及び若手を代表して40歳代の井上さんに一言しゃべって貰い、最後に米田さんによる中締め、そして私が総括、来年の開催案内を行い、再会を期して会は無事終了致しました。

今回出席者31名のうち約三分の二が、戦後生まれの若手でした(と言っても60歳前後ですが)。ほぼ全員が現役として多方面で活躍中であり、彼らの元気な前向きな話を聞いていると、高齢者のOB会には見られない活力が感じられ、何か元気・勇気を貰ったような感じが致しました。

今回も保科さんを中心とする若手には、準備段階から大変お世話になりました。彼らの活躍がなければ、このような年代を超えてのOB会は成功しなかったでしょう。改めてお礼を申し上げます。

第3回ニチメン・シカゴ会出席者



写真 (A)

前列左より

小橋雅寛、田中長典、杉本佳久、三分一克美、
岩田英昭、米田信一、五月女穰

後列左より

北野廣道、砂子和久、廣内卓生、廣本昌也、
牧浦弘幸、藤井敬三、鈴木淳一、保科孝

写真 (B)

前列左より

池永浩、木村直滋（富士機械）、福本匡純、
岩村久雄（東洋通信）、木下龍三、永田堅志郎、
小幡和徳

後列左より

藤久保俊三、高野昭彦、岩本真二、松尾健、
平嶋成晃、山内直之、井上友宏



写真 (A) (B) に写っていない出席者 市岡知良、長谷川純一



長老の挨拶——三分一さん



乾杯の音頭——岩田さん



写真 (E)

若さ溢れる我ら戦後世代— (左から)

小幡和徳、北野廣道、岩本真二、砂子和久、山内直之、井上友宏

第29回「ニチメン如月会(経理本部懇親会)」開催ご案内

浅 利 真 司

日 時 2016年6月18日(土) 12:00 - 14:00
会 場 アイビーホール
東京都渋谷区渋谷 4 - 4 - 25
会 費 男: 7,000円、女: 5,000円
世話人代名 島 憲一郎
幹 事 浅利 真司(連絡先: 携帯090-3228-4118
メール shinji.asari@hotmail.com)

後刻、ハガキないしはメールにて、ご案内、出欠を問い合わせいたしますが、経理本部に係りある老若男女の皆さま今年も奮ってご参加をお待ちしております。

2015年度6月7日開催 第28回如月会 出席者アルバムより



<全体写真> (21名) (敬称略)

(前列左から)

星野則和、細井衛、三浦甲蔵、永田堅志郎、三分一克美、矢口三郎、名島憲一郎、内海和男、西川周、金井湧二

(後列左から)

福井芳樹、中村智幸、滝澤(萩原)なおみ、山本昌裕、大羽陽一郎、浅利真司、飯田純子、榊潟磐夫、田中聡太郎、平野勉、小竹浩之

俳句の会「いろは句会」

塚 本 幸 雄

11月の穏やかな初冬の日、「いろは句会」と「金町句会」の有志6名が都心では数すくない武蔵野の面影を残す「東京都庭園美術館」と「自然教育園」の散策を楽しんだ

当園は目黒駅から約8分に位置し瀟洒な住宅街にある

園内は予想していたほど紅葉は進んではいなかったものの柔らかな日差しの中に芝生が残っていて池面のさざ波も美しく、約2時間の散策を楽しんだ後来春の吟行句会での再会を約し駅前ビヤホールでの乾杯で解散の運びとなった

以下に本年5月から10月までの例会に提出された句から皆さん自薦の俳句をご披露致します

流鏑馬の射止むる的や柿若葉
木洩れ日の葉影映して風薫る
秋彼岸老いて菩提寺遠くあり

宇治田薫風

くちなしの花の香りを活けにけり
炎天の建築の音迫りて来
秋の夜や親しき友の長電話

久保田悦子

苦吟する我に紫陽花微笑みて
ひとときの命の叫び蝉しぐれ
グラス手にショパン聴き入る秋の夜

佐藤 英二

面構へおどろおどろし倭武多貌
街路樹の熟れし実ざくろ空真青
耀ふてすすきゆらりと風の中

下川 泰子

廃屋の奥に鮮やか柿若葉
炎昼や千年杉の静まれり
秋天や連れ合ひ求む雲ひとつ

塚本 光生

天地の荒ぶる神や秋出水
雑談の中へ蟬螂入り来る
老松に支柱あまたや新松子

藤野 徳子

串打つや鮎の背鰭をくねらせて
北国の闘魂熱気倭武多の来
稲光筑波二山を駆け抜けり

若月 義和

『野村喜久雄さんを偲ぶ会』

長 谷 川 洋

2015年11月19日、横浜“崎陽軒”貴賓室に、心あるOB有志が集まり野村さんを偲んだ。厳かに しかも和気藹々と。かつて野村さんお気に入りの“崎陽軒”の上品な中華料理で。

水庫博夫さん（機友会会長）の掛け声で、献杯と黙想をした。

現役時代の副社長としての野村さんのご威光はもとより、OBとなってから我々とは“ニチメン湘南グルメ会”、“ニチメン湘南ゴルフ会”における重鎮としての野村さんの存在感もきわめて印象的だった。

グルメ会でも、遠くに座る若手OBにも、

声をかけられて、発言させる心配りもされた。

体調不良で出席ならなかった、島崎京一さんも本来ならば、この会の主催者の第一人者となるべきであった。

北村俊夫さん、藤野泰三さん、吉水稔さんも同様の理由で欠席已む無しだった。

出席者全員が、それぞれ野村さんとの出会い、受けたご薫陶、ご指導を語った。

口々に、在りし日の野村さんの素晴らしさに言及された。

野村さんほど私心の無い人を他に知らない時まで。上司として人の話をよく聞いてくれたこと。これらの声は天国の野村さん



後列左から、長谷川洋、川西 勲、竹内可能、北川 敬、福田尚生、大平栗雄
前列左から、大山弘雄、笠井公雄、丸山泰三、水庫博夫、杉本佳久

毎に、食事とその後のカラオケが「子丑寅寅会」恒例の行事になりました。

泊りがけで冬の北陸に蟹を食べに行った時は、「わしは歌われへんから、お酒の当番をしまっさ」と、部屋カラオケを楽しむ3人に大寅さんがお酒をつくってくださいました。

時にはお得意の「お富さん」を歌われることもありましたが、何時も聞き役に回られてた野村さんが、ご長男の隆志さんをピンチヒッターに連れてこられ、大いに盛り上げてくださったこともありました。

暖かい気遣い、心配りをしてくださる野村さんでした。

奥様をお無くされた後も、一人でお暮しになっておられ、長患いで苦しまれることもなく、一週間ほどの入院で大往生された

のも、最後のご家族に対するお気遣いだったのでしょう。

二十数年昔のことながら、いまだに強く印象に残ってる野村さんの言葉があります。

野村さんがニチメンをお辞めになる際のパーティーでのことばです。

「私は周りの人に恵まれ、助けられて本当に幸せな会社人生を送らせて頂きました。私ほど幸せな会社生活を送った人は、他に居られないのではないかと思うほどです。」と挨拶されました。

会社をお辞めになった後は、それにも増しての多くの人たちに囲まれての、幸福な余生を楽しまれました。天国でも多くの人たちと楽しくお暮しになることでしょう。

合掌



(左から) 山本正巳、故野村さん、南直昌、(右側に) 木村幸史

野村さんを偲んで

南 直 昌

“お友達”という言葉がありますが、お友達って、どんな関係を言うのでしょうか？もちろん、それは人により解釈はいろいろとあると思いますが、例えば、年齢が一回りも上の方と仲良しになったら、お友達って呼んでいいのでしょうか？私たち「子丑寅寅会」の仲間是一回りも年上の野村さんと、本当の意味の仲良しのお友達になれました。

現役時代の私にとっては、お偉い方という存在で、個人的には全くお付き合いは有りませんでした。私が引退後、もう14・5年前だったでしょうか、あることが切っ掛けで、野村さんと仲良くなりました。それから、先に亡くなられた奥さまも一緒に家族同士のお付き合いも始まり、心の中に内緒にすることなど一切無しに、思うがままに、お互いに話し合える仲になったと申せます。偉ぶらず、出しゃばらず、笑顔を絶やさず、話し相手のお喋りには笑顔で耳を傾ける、なんとも最高のお人柄の方だったと思います。

野村さんとお付き合いさせて頂く中で、エピソードは数え切れないくらいあります。

皆さんもご承知の通り、野村さんはとても小食でした。月に一・二回は食事をご一緒させて頂きましたが、召し上がる分量もお酒の量も、とても少なく、いつも“割り勘負け”をされていましたねえ。酒飲みで大食いの私は勿論、多くの仲間は野村さんとの会食では、全員“割り勘勝ち”だったと言い切っているのでしょうか。ただ、その小食の野村さんがとてもお好きな食事はありまして、それが、“インド料理”と“牛肉”でした。

“ワシはインド人でっさかい・・・”というお言葉は多くの方が耳にされたと思いま

す。寒さにはかなりお弱かった野村さんのお言葉ですが、そのインドは初めての海外ご赴任先だったこともあって、インド料理は大好きでいらっしゃいました。

ある日、大阪はミナミにあった（今は堺筋本町に移転）インド料理の店にお一人で飛びこまれて、お気に入りになったのか、翌日お声掛けを頂きご一緒しましたが、とても嬉しそうに召し上がっていました。私もインド料理は好きだったので、それ以降10数年、月に一回ペースですずっとご一緒させて頂きました。ただ、小食の野村さんですから、大好きなタンドリーチキンはきちんと召し上がりましたが、サモサなどの前菜や、カレーや、ナンは、ほとんど召し上がりず、タンドリーチキンに集中されていましたねえ。

小食の野村さんがもう一つお気に入りだった食べモノは、牛肉でした。牛肉が大好きと分かってからは、これまたしょっちゅう鉄板ステーキにご一緒させてもらいました。

前菜などには手を付けられず、ステーキが出て来た段階で、もう一気に美味しそうに召し上がっていました。

ただ、牛肉ではもっとビックリさせられました。それは、2・3年前だったでしょうか、フィレビーフを自分たちで炭焼きして楽しむお仲間に入れて頂いた時、10人近いメンバーの中で一番たくさんステーキを召し上がったのが野村さんでした。それも、300グラム程度の大きさのモノを、なんと3つ、いや、ときには4つも召し上がっておられ、小食漢の野村さんを大食漢に変貌させるのが牛肉でした。

あ～、もうそのタンドリーチキンも牛肉もご一緒出来ないのはとても残念であり、

[illegible]

野村さん、これからも、よろしく！！

川 西 勲

◇翌朝、野村さんの社宅に伺い、朝食を済ませ、昨夜持参した雑貨類の店開きをしました。カラーフィルム4箱、トランジスターラジオ数台、お茶、おかき類、ボールペン等々。野村さんから「こんな品数をよく無事に通関できたね。牛肉の生もあるし」と、また「連中のほしがるものも結構あるので、一個や二個献上してもいいように数は少し膨らましておいたが、よくぞ無傷で通関できた。君はラッキーだ」と大褒

感心されていました。実は斯く斯く然々、空港税関内で、ある日本人と出会い、その方のことばに従いそばに付いていたので、荷物の中身は覗かれず税関を通過できたこと、ただいささか慌てていたのでお名前を伺わずに別れたむね申し上げたら、野村さんは「きっと大使館のI一等書記官だろう。後でお礼に伺うよ」と言われ、ずうっと後になって、私も大使館で件の紳士に出会い、I氏であること野村さんのご推察どおりでした。

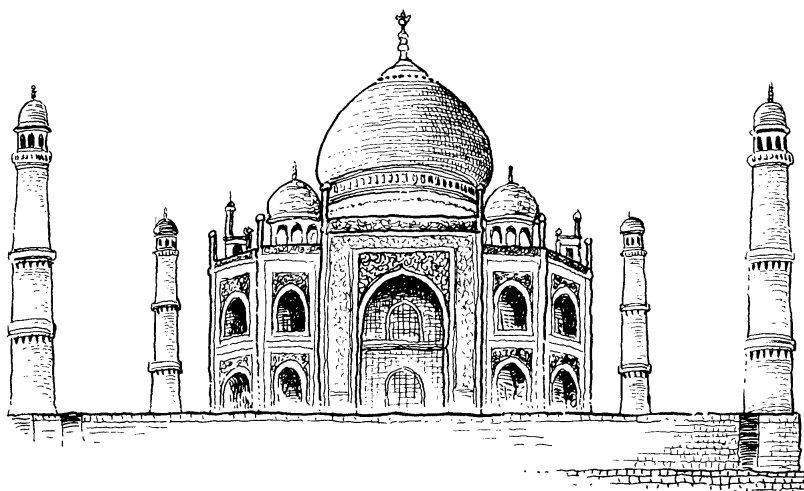
◇この日の朝食時も、またその後の食事時も私が日本から持参した牛肉、納豆類には一度も目にしたことはなく、そう言えば、野村さんは使用人に何か言って、小さな包みを5、6個持って来させ、「川西君、僕は世話になった日本人の方に、出勤前に自宅を回って挨拶してくる。君は、事務所に戻ってくれ」言われたのが、12月16日、ニューデリーでの初出勤のことでした。

◇税関を無傷で通ったことは、後になり私が本当にラッキーであったこと、十分思い知らされました。この後、空港への送迎は、客がよほどの大物でない限り、私の平常業務でした。ニューデリーの独身・单身

駐在員間のコンパで替え歌としてよく歌われた戯れ唄に「あと何回空港に通えば、日本に戻る」にある通り、空港にはよく通いました。数多く出迎えた客のほとんどから、胸に挿してるボールペンをそのまま進呈したとか、電池式シェーバーを進呈したとかいう類いの話をよく聞かされました。

◇赴任して数か月後、手狭になった事務所を引き払い、首席駐在員社宅の一階を事務所に改造して移りました。二階の小部屋に野村さんが、大広間にベッドを入れ私の寝室兼会社の物置に、キッチンが事務所のお勝手、食堂は大広間と野村さんの小部屋の間のパントリーを利用のごとく模様替えして、野村さんとは1年ほど起居を共にいたしました。

◇今日現在、大げさに言えば、私の人生の七十七年分の一年を占める期間、野村さんの四六時中の言行は、私の生活の一部であり、そのご薫陶、そのご指導は言葉ではとても言い尽くせません。今なお、野村さんをBara Sahib という表現で敬称しています。初めての海外駐在で、野村喜久雄さんに出会えたことまことに幸いでした。



【編集後記】

毎年同じことを言うことになるが、またまた今年も年の瀬が迫り来て、まもなくあけて2016年に入る。

東京社友会も、7月に第10回総会を催したが、旧長月会から新生“社友会”に生まれ変わって、ちょうど十年が過ぎる。

役員・世話人のうち8人はA級十年選手だ。“戦力外通告”はまだ聞こえてこない。皆 老躯に鞭打って、総会や、新年会の準備に大奮だ。

昭和の名女優原節子が逝った。同じく1920年生まれの山口淑子、森光子も既に逝ってしまった。

“花は散るべくして咲き”、人間も生まれて そして必ず死ぬ。

“Memento Mori”を忘れはしない。しかし“人生の終焉を思うことはつらいことだ”とかの米国映画俳優グレゴリーペックも言っている。

「死んだ人から“死とはどういうものか?”と誰も聞けない」と瀬戸内寂聴がNHKで語っていた。死人に口なしだから聞けるはずが無い。

今期も、ニチメンOBの物故者数、東西合わせて22名。

安らかに眠られんことを祈ります。

敬愛する大先輩・野村喜久雄さんも苦しみことなく、ある日忽然としてご逝去された。

“棺を蓋いてこと定まる”というが、野村さんは生前から、そのお人柄、判断力、指導力、責任感、私心なき言動は夙に知られていました。

本誌に掲載の追悼文に、その人となり、エピソードが窺われます。

もはや会報のレギュラー寄稿者となった福富直明さん、竹内可能さん、高尾勝さんの見識に敬意を表します。勿論その他の人々にも感謝。

寒くなります、健康にご留意されて、1月20日（水）の社友会新年会でお会いいたしましょう。

（長谷川 洋）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

発行人	；倉又 則夫	副会長兼代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	副会長
アドバイザー・スタッフ	；倉持 次雄	世話人
	竹内 可能	世話人
印刷所	；(有) 関 内	印刷